12
二葉
小社 310

のりもののはたらき

文部省検定済教科書
新教育実践研究所著

しゃかいか　三年下

T1A7
2LO
12

60011
教科書文庫
6
300
34-1950
01304
49978

教科書文庫
6
301
34-1950
0130449978

のりもののはたらき

第三学年　下

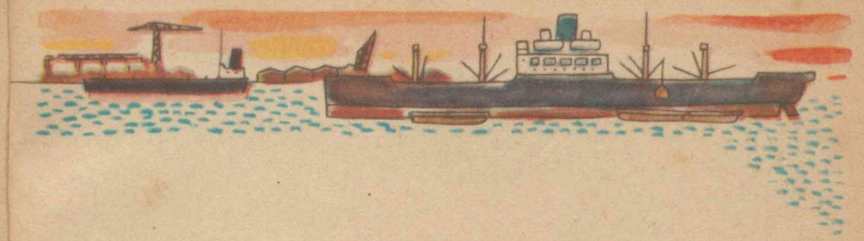
昭和二十五年八月十二日
文部省検定済

小学社会科用

広島大学図書
0130449978

中央図書館

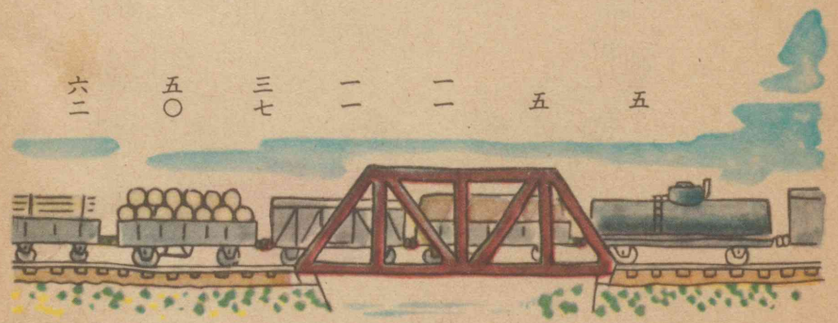
広島大学図書
0130449978



もくじ

船と港

えんそくのそうだん　五
港町へ　五
○電車にのって　一一
○汽船がいしゃへ　一一
○はとば　三七
○船と港あそび　五〇



二

かもつとかもつれっ車　七一
うれしいおくりもの　七一
かもつ駅　八一
駅のつみに、おろしに、しらべ　九四
おじさんの出むかえ　一〇〇
のりものしらべ　一一五
発表かい　一二〇

みなさんへ

のりものには、りくをはしるもの、海や川をはしるもの、空をとぶもの、大そうはやくはしるもの、たくさんのにもつをはこぶものなど、いろいろとありますね。そしてどれも、わたしたちのくらしに大そうやくだっていますね。

この本には、しげる君やみち子さんたちが、のりもののはたらきをねっしんに、べんきょうしていくようすが書いてあります。

わたしたちも、自分たちの町や村のことをもとにして、のりもののはたらきをいろいろとべんきょうしていきましょう。

一　船と港

えんそくのそうだん

「あきら君、この船のもけい、ずいぶん大きいね。」

「うん、これは港にある一ばん大きなきゃく船の平和丸かもしれないよ。」

「きみ、見たことがあるの。」

「そう、おとうさんとことしの

夏行った時にね。」

「このしゃしんはなに。」

「これが、港のとうだいよ。」

「これは、かもつ船だ。」

「これは、港のえ地ずね。」

「いろいろな船をつくってあそびたいなあ。」

「このえ地ずを見て、教室に港をつくったらなお、おもしろいよ。」

しげる君たちの組では、教室に先生が用意した船のしゃしんや、もけい、港の

ようすがわかるいろいろなえなどをかこんで、みんながさかんに話しあっています。みんなの話しあっているのをじっと見ておられた先生が、

「いろいろな船をつくったり、港のかたちを教室につくったりして、おもしろくあそぶのにはどうしたらいいでしょう。」

ときかれました。みんなは、

「え本を見ます。」とか、「さんこうになる本をたくさん読みます。」とか、「港へ一ど行ってみます。」などとこたえました。

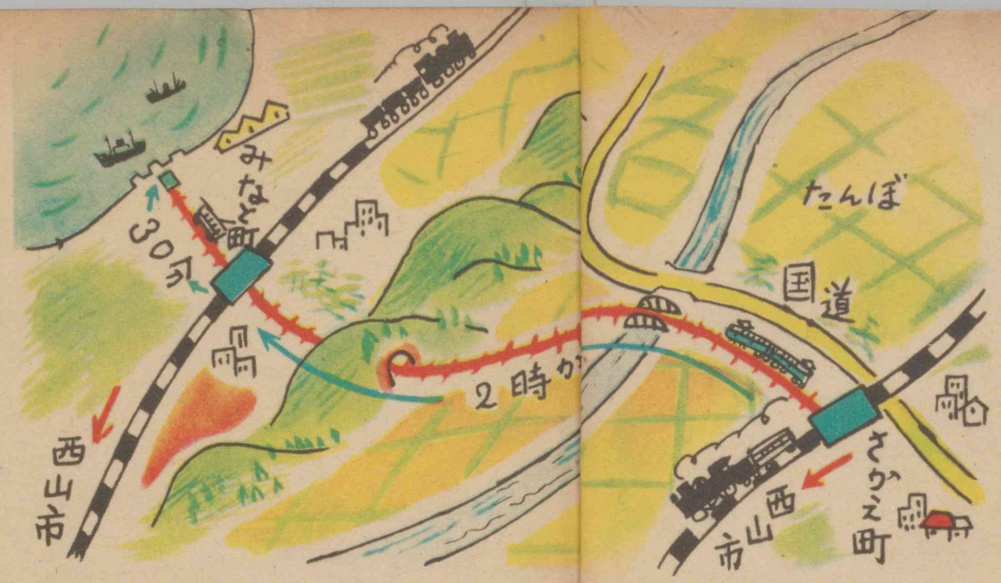
先生が、

「いろいろなものをなるべくほんとうのようにつくって、おもしろい『船と港あそび』をするために、一どみんなで港へ行ってきましょう。」

とおっしゃったので、みんなはわあっとよろこびました。

みんなは、先生といっしょに見学のそうだんをしました。

あきら君とみち子さんのふたりは



行ったことがあるので、二人にかんたんな地ずをかいてもらって、港までの道じゅんを話してもらうことにしました。港へ行ってしらべるもんだいは、

○港には、どんなしゅるいの船があるか。

○それらの船は、どんなしごとをしているか。

○港はどんなにできているか。

○港にはどんな人たちがいて、どんなしごとをしているか。

などにきまりました。

また、あきら君たちのせつめいをもとにして、この町の駅を出る時間や、港町での道じゅん、帰る時間なども、きちんときめました。

港の汽船がいしゃにつとめているみち子さんのおとうさんが、見学の日に、港をいろいろあんないしてくださることになったので、みんな大よろこびでした。

見学に行くとちゅうのちゅういや、りっぱな見学のしかたについても、みんなで話しあいました。

港町へ

電車にのって

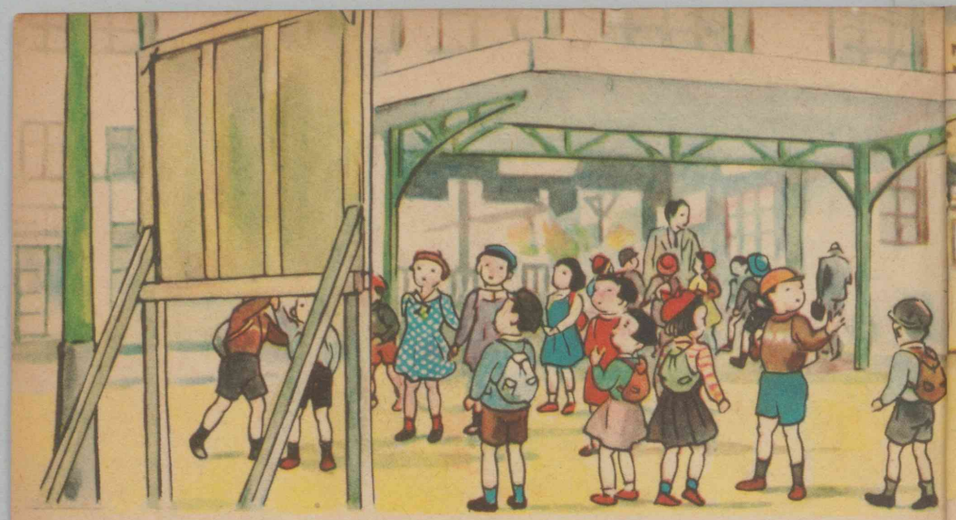
きょうは、たのしみに待っていた港町へ行く日です。

しげる君は、おかあさんにつくっていただいたおべんとうや、ちょうめんなどを小さなリュックに入れて、町の駅へいそぎました。

港町へつとめに出かける人たちが通るので、おもての戸がほとんどしまっているあけがたのまちも、さびしいことはありませんでした。

この町で、一ばん大きな林百か店のある四つかどで、みち子さんに出あいました。みち子さんはおとうさんといっしょでした。いろいろ話しながら行くうちに、いつのまにか駅につきました。

もう駅の前には、おおぜい友だち



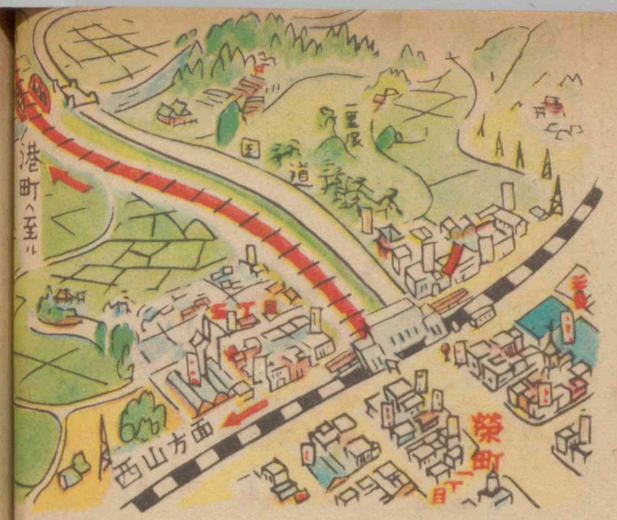
が集まっていました。駅前の広場には、このごろつくられたばかりの、町の大きなえ地ずがあります。みんなは、そのえ地ずを見ながら、自分たちの家の場所をさがしたり、きょう行く港町のある場所を話しあったりしています。

しげる君は、このあいだあきら君たちが、せつめいしてくれた時の地ずは、これをもとにしてつくったのだろうと思いました。

町の駅を中心にして、港町の方へ行くせんろと、ちがう大きな町へ行くせんろとが大きくかかれています。港町へ行くせんろにそって大きな道が通っています。そのところどころに松なみ木や、むかしから名高いところのことなどもえでかかれてあります。

道のすぐわきに一りづかとかいたところがあります。

しげる君は、なんのことかわからないので、みち子さんのおとうさんにきいてみました。



「この道はむかしのかい道で、鉄道せんろのしかれないころは、みんなこの道を行ったりきたりしたものだ。しげる君の見つけたのは一りづかといって、むかしのたび人が、これをたよりにどのくらい自分があるいたか、そのみちのりをはかったものだ。電車のまどからもよく見てい

ると、見えますよ。」

「おじさん、このせんろはいつごろできたのですか。」

「そうだね。今から三十年ほどまえかな。このせんろができてからは、この町も港町も、ずいぶんにぎやかな町になった。とくに港町は大きくなって、りっぱなたてものが、かぞえきれないほどたつようになった。」

かいさつの時間が近づいたので、みんなはならんで、先生のあとからまちあい所の中へはいりました。

まちあい所の中は、つとめに出かける人たちでいっぱいでした。

長いこしかけに、こしをおろしてしんぶんを読んでいる人もおります。きっぷ売場の前には、十五、六人の人々がならんで、小さなまど口から行きさきをいってはきっぷを買っています。見ていますと、ずいぶん早く買える人と、なかなか時間のかかる人とがあります。

しげる君は、みんなの人がおつりのないように電車ちんをはらったら、駅の人もみんなもべんりだろうと考えました。

きっぷ売場のよこにつづいて小にもつを出すところがあります。

どこかのおじさんが、なわでしっかりにづくりしたトランクを駅の人にわたしています。小にもつがかりのむこうには、五、六人の人たち

が、なにかいっしょうけんめいつくえにむかってしごとをしています。

「チンチンチン」と電話きのベルがなると、駅の人がすぐ出て、なにか話しています。

「きっと、電車や汽車のことについて、となりの駅と話をしているにちがいない。」

と、しげる君は思いました。

やがて、かいさつがはじまりました。二れつにただしくならんだしげる君たち。は、先生のあとにつづきました。先生はだんたいのじょう車けんをかいさつの人に見せて、

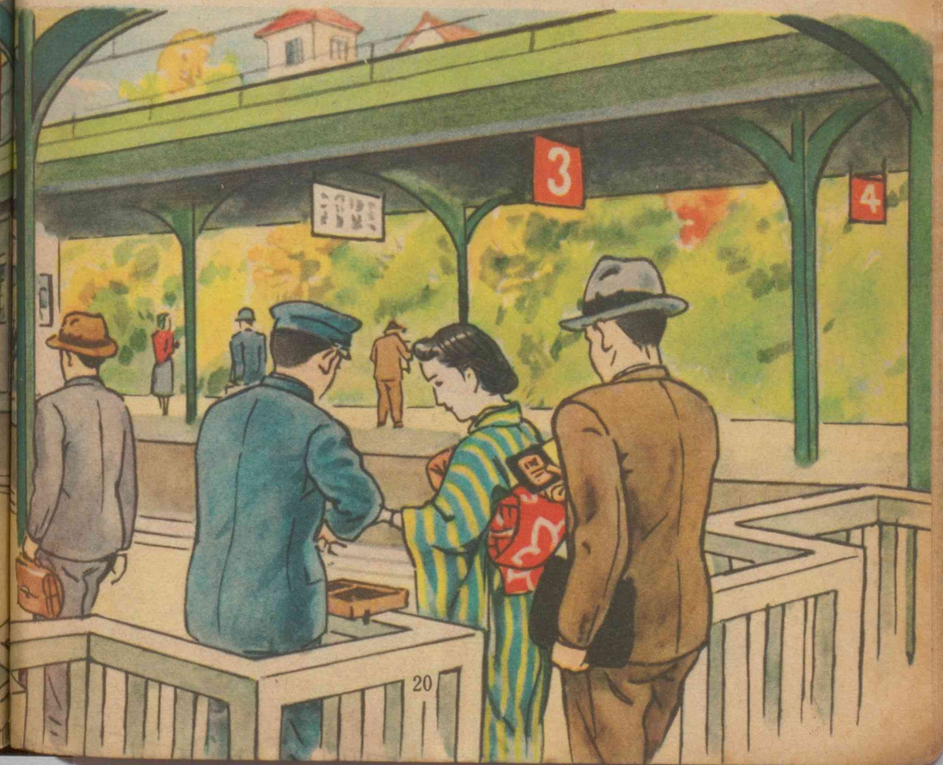
「おねがいします。」

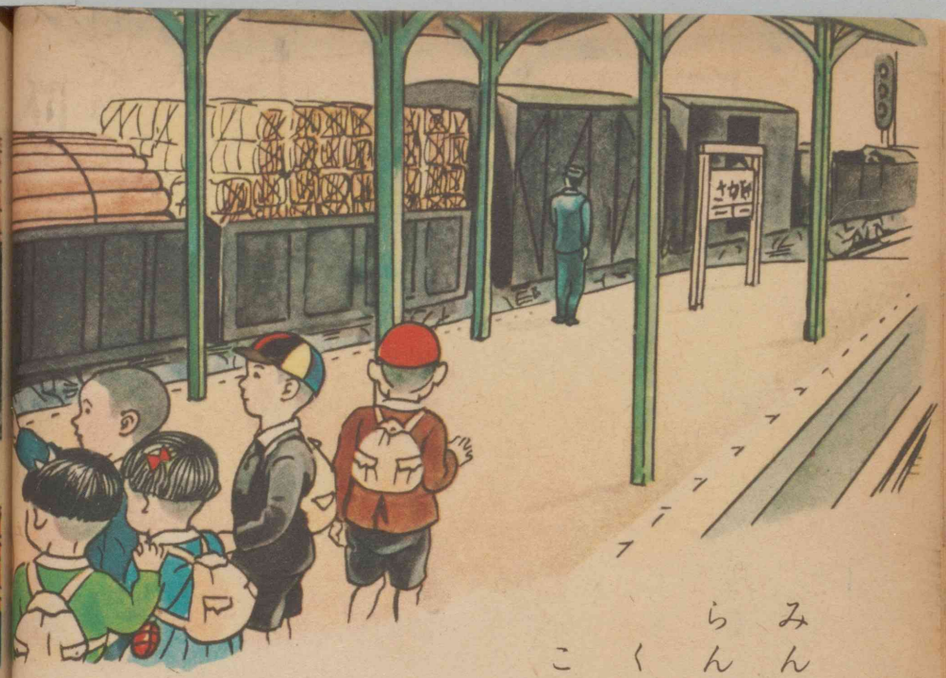
といっています。

ていきけんを見せてかいさつ口を通る人たちや、きっぷをきってもらってはいる人たちが、ながれるようにプラットホームに出て行きます。

「港へ行く電車は、港町からくる電車がおりかえして行くのだ。」

と先生がみんなにおしえてくださいました。まだ電車はきていませんでしたので、



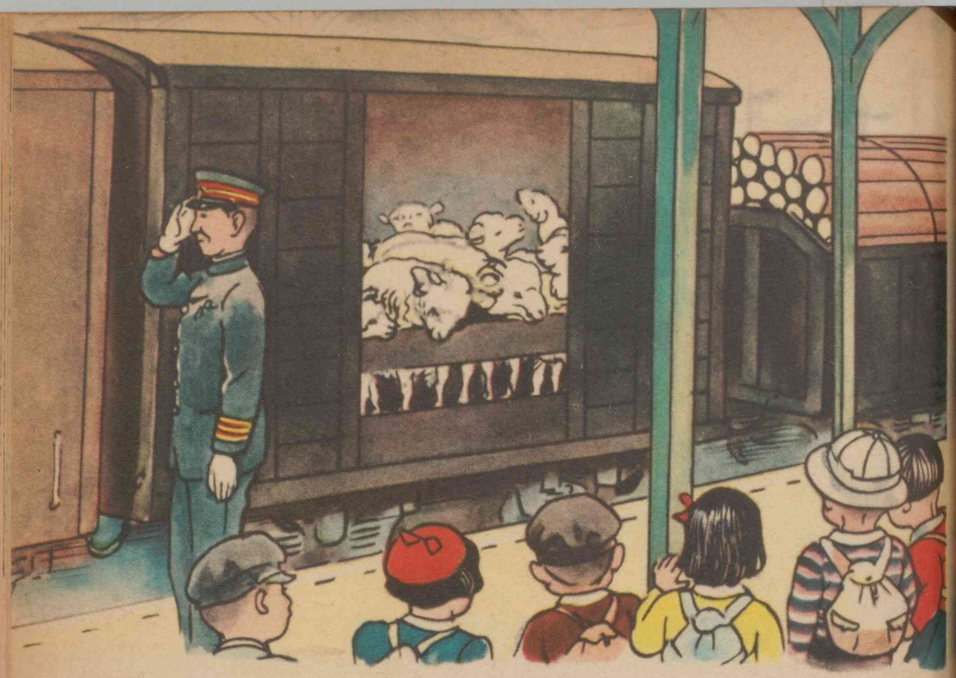


みんなは、白いせんよりさがってならんで待ちました。西山市の方へ行くせんろにかもつれっ車がすべりこんできました。駅長さんらしい人が、プラットホームにたって、かもつれっ車をむかえました。

「大きな材木がつんであるなあ。」

「あれは、炭のたわらね。」

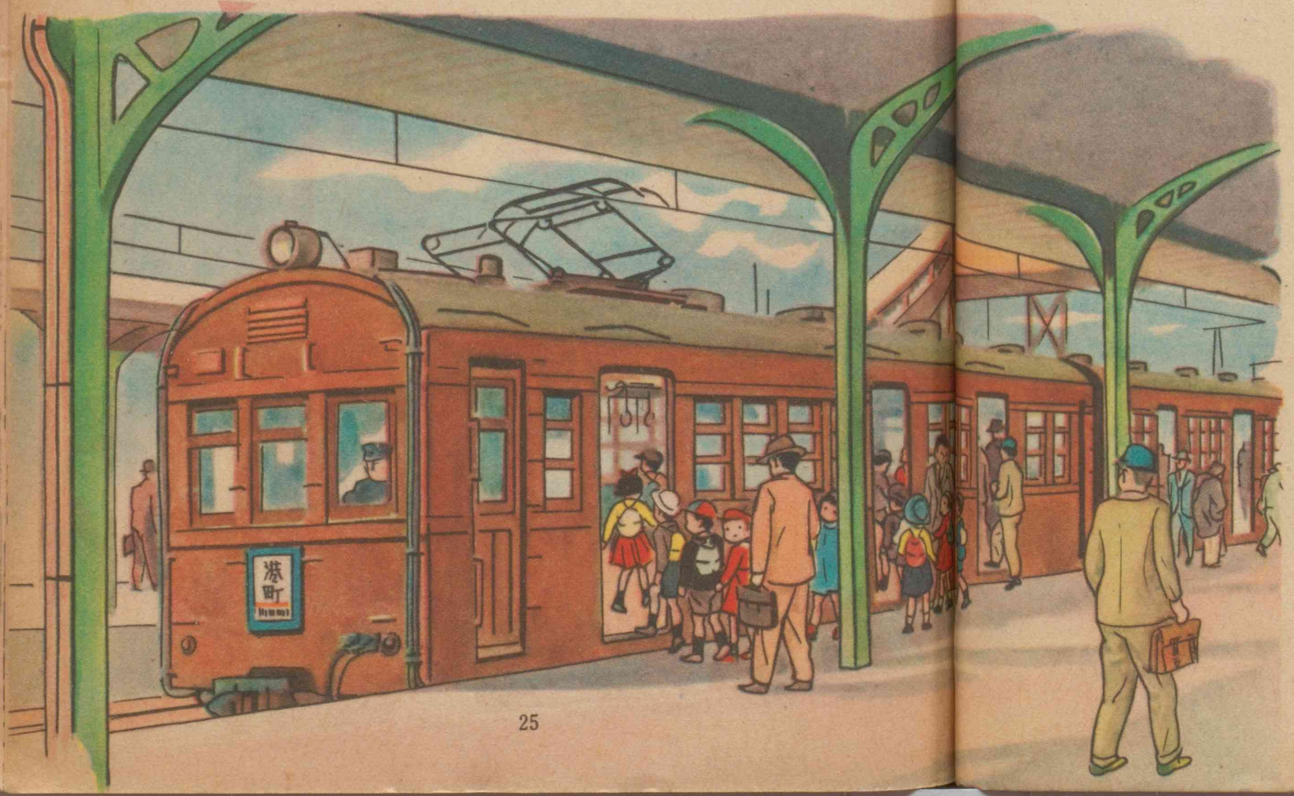
「あ、めん羊がかおを出しているよ。」



みんなは、とまったかもつれっ車につんであるものを見て、にぎやかに話しあいました。しばらくして、かもつれっ車は、大きな汽てきをならして、駅を出て行きました。だんだん小さくとおざかって、けむりだけをのこしていきます。

今まで、みどりだった駅のはずれのしんごうとうが、い

つのまにか（赤）にかわっていました。
やがて、港町の方から電車がきました。
しげる君たちは、二つの入口からのりました。みち子さんが、
「のる人の方がずいぶんおおいわね」
と、しげる君に話しました。みち子さんのおとうさんが、
「この電車は港町へ近づくにつれて、ずいぶんこんできますよ。大きな港町の工場や、はとばにつとめる人がたくさんこの電車をつかうからね」
と話してくれました。
がたんとゆれて、電車がうごき出しました。
みち子さんのおじさんといっしょにたっておられた先生が、うで時計を見て、

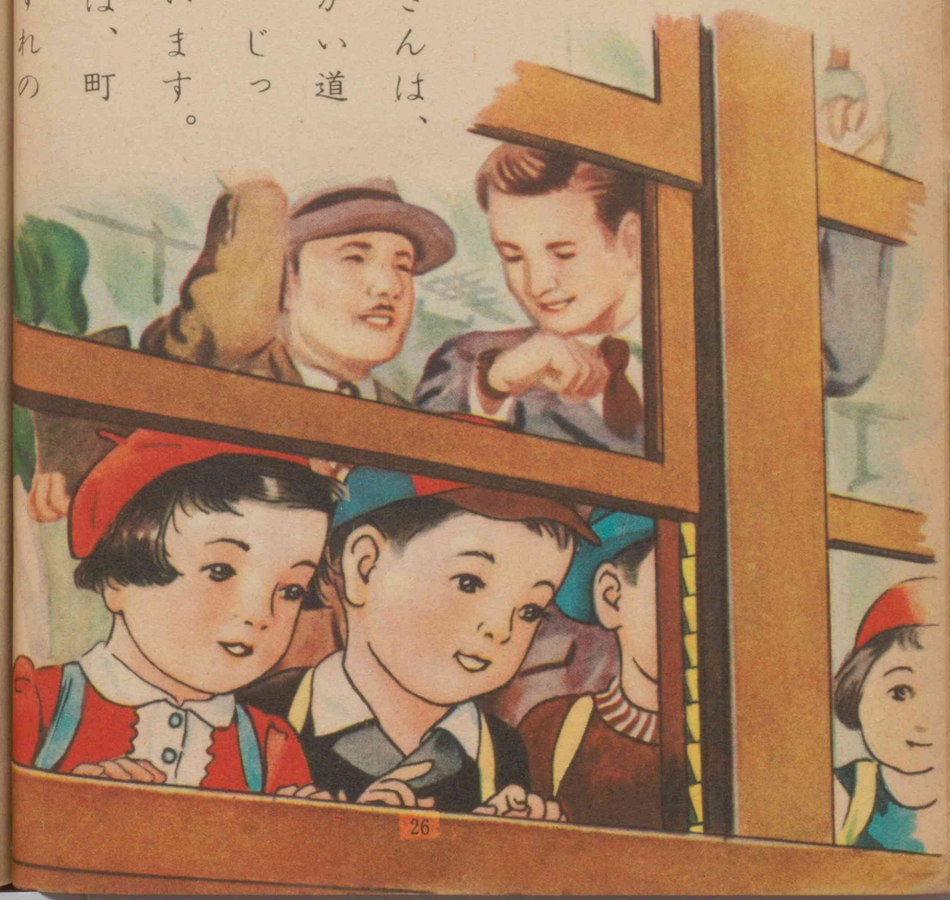


「ちょうど時間です。なかなかせいかくですよ。」

と、おじさんに話しています。

しげる君と、みち子さんは、せんろにそったかい道をまどから、じっと見ています。

今では、町のはずれの



ようになっているかい道にそって、こうしまどのある家がつづいて見えます。大きな松の木も、道にそってたちならんでいます。

「むかし、ここはしゅく場だったので、そのころはきっとたび人でにぎわっていたことだろう。汽車や電車が通るようになって、町はだんだん大きくなってきたのだよ。」

と、おじさんがしげる君たちに話してくださいます。

しげる君は、駅の近くがにぎやか

になるのは、おおぜいの人がのりものをつかって、行ききしたり、いろいろなことにべんりだからだろうと、思いました。

「ほう、あれがさっき話した一りづかだよ。」

しげる君はおじさんのゆびさす方に、まがったふるい松の木が、一本たっている小高いところを見つけました。

電車は、いくつかの駅を通りすぎました。おりる人よりものる人の方がおおくて、電車は、だんだんこんできました。

先生が、

「ようやく半分きたかな。あと一時間ぐらいだろう。」

とみんなに話してくださいました。

さかえ町行きの電車が、

「ガアーッ」

とすれちがって通りました。白くおびのように見えるかい道には、バスやトラックや、馬や牛がひくに車がさかんに通っています。

しげる君は、いつかおとうさんか

ら、『自分たちの町から港町へ通っている道は、国道だ。』とおしえてもらったことを思い出していました。

両がわのたんぼは、今がとり入れのまっさいちゅうのようで、のうかの人たちが、もう、のらに出て、いそがしそうにはたらいているのが見えます。電車が「ゴウゴウ」と大きな音をたてて、鉄きょうをわたったあとで先生が、

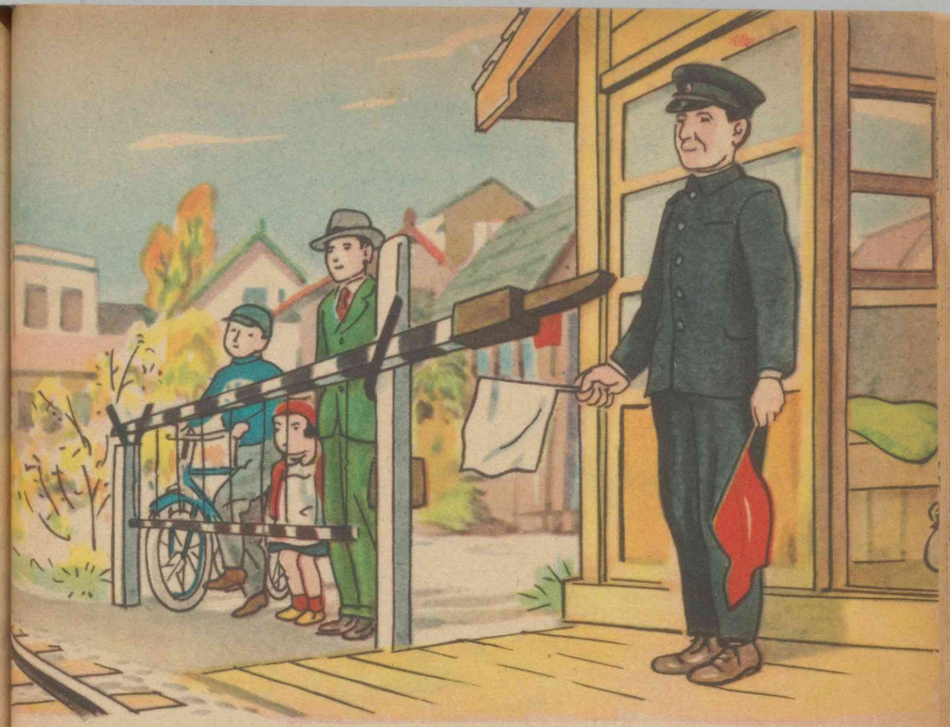
「こんどは、トンネルにはいるよ。

といわれました。今までせんろといっしょにはしっていたかい道が、山にそって右の方へ大きくまがっています。

トンネルを出ると、目の前がずっととおくまでひらけて海が見えてきました。

町はずれの海岸には、松の木が林のようにつづいて見えます。

電車はやがて、町の中へは



いりました。大きなコンクリートのたてものや、工場のえんとつ、長くつづいたそうこなどが見えます。

いくつかのふみきりを通りました。ふみきり番のおじさんが、しゃだんきをおろして、白いはたをよこに出しています。電車はだんだんはやさをゆるめて、ひろい大きな駅にすべりこみ

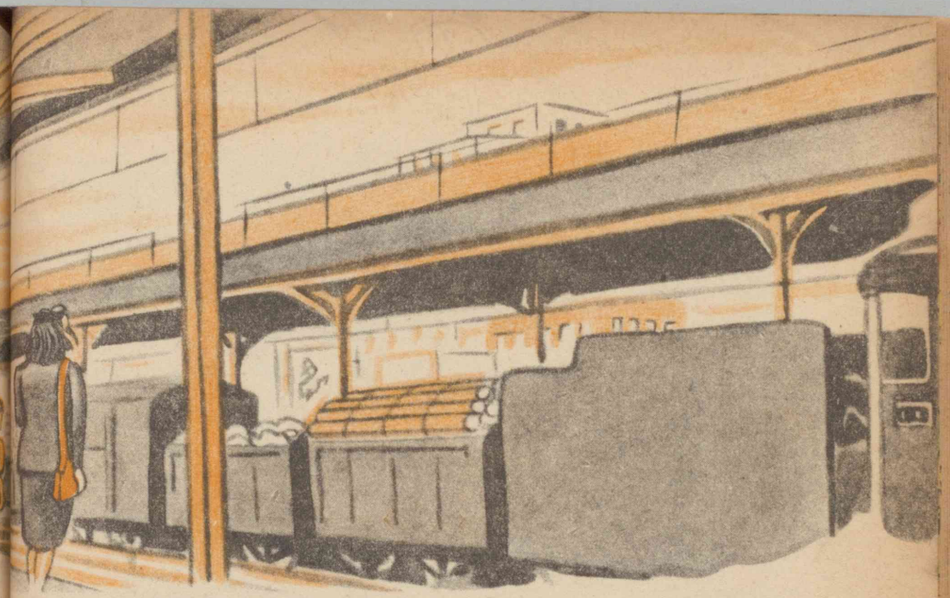
ました。

かくせいきから、なんかいもこの駅の名まえが、つたえられます。

おりたはんたいがわのホームに、電気きかん車のついたれっ車がとまっていました。きゃく車のまどの下に、西山行きと書いたものがかけてあります。

「これにのると西山市まで行けるのだな」。

と、しげる君は思いました。

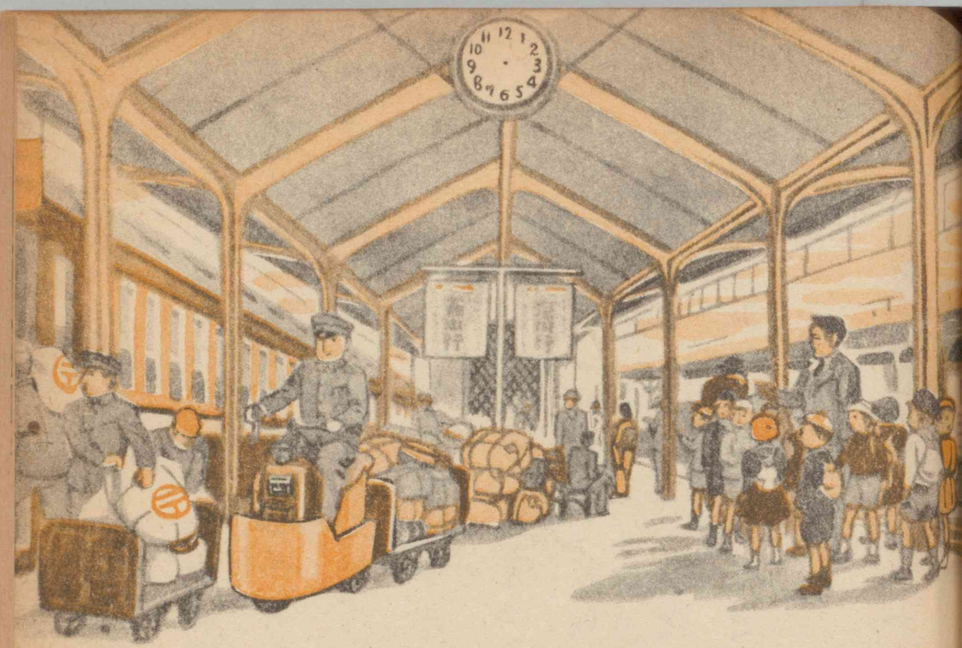


駅の人がに車をひとりでうんてんしながら、にもつ車のところへにもつをはこんでいます。先生が、

「あれは、電気の力でうごかしているのです。トラクターといって、大きな駅ではよくつかわれています。」

と話してくださいました。

ゆうびん車には、〒というしるしのついた大きなつつみをつみこんでいました。いくつかのホーム



が、べつにつくられて、たくさんの電車や、汽車や、かもつれっ車がうごいていたり、とまったりしています。先生が、

「こんなにたくさんの電車や、汽車が、まい日安ぜんに、そしてきまりどおりの時間にうごくのには、たくさんの駅の人たちが、いろいろなしごとをうけもってはたらいてくれるからです。」

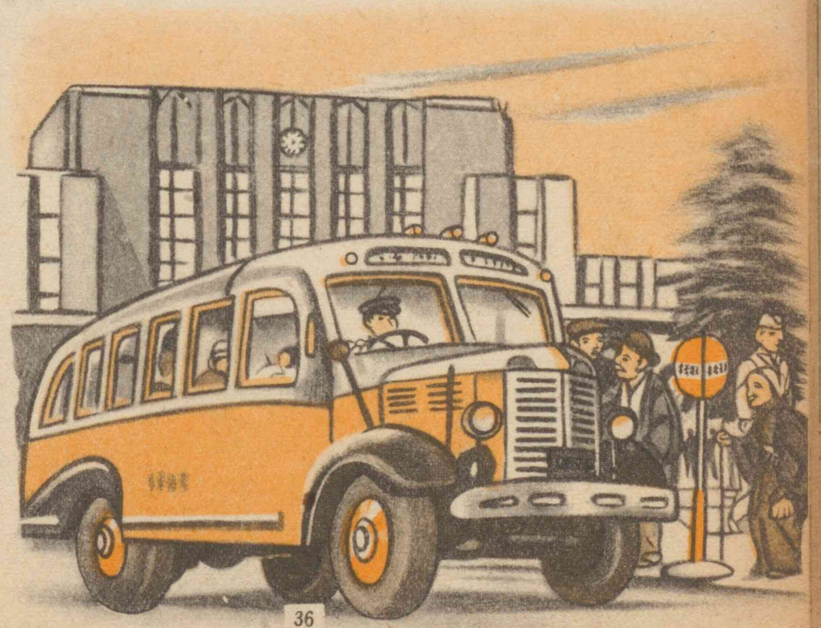
と話してくださいました。

しげる君たちは、コンクリートの長い地下道を通って、出口から駅前に出ました。

ゆうらんバスとかいてある大きなバスが、駅前にとまっていて、二十人ばかりの人たちがそのバスにのりこんでいるところでした。みち子さんのおとうさんが、

「この町には、ずいぶんいなかの人たちが見ぶつにやってきます。このごろでは、外国の人たちもみえるようになりましたよ。」

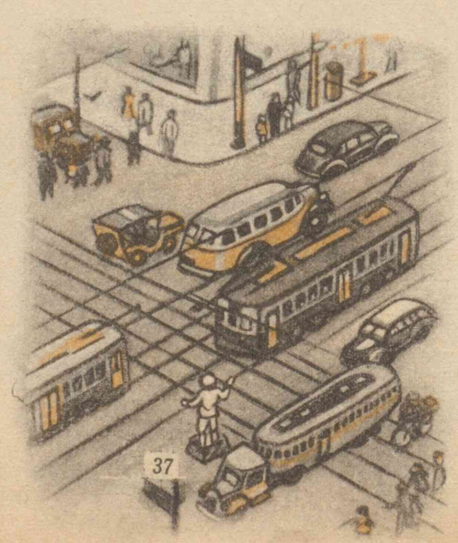
とみんなに話してくださいました。



○汽船がいしゃへ

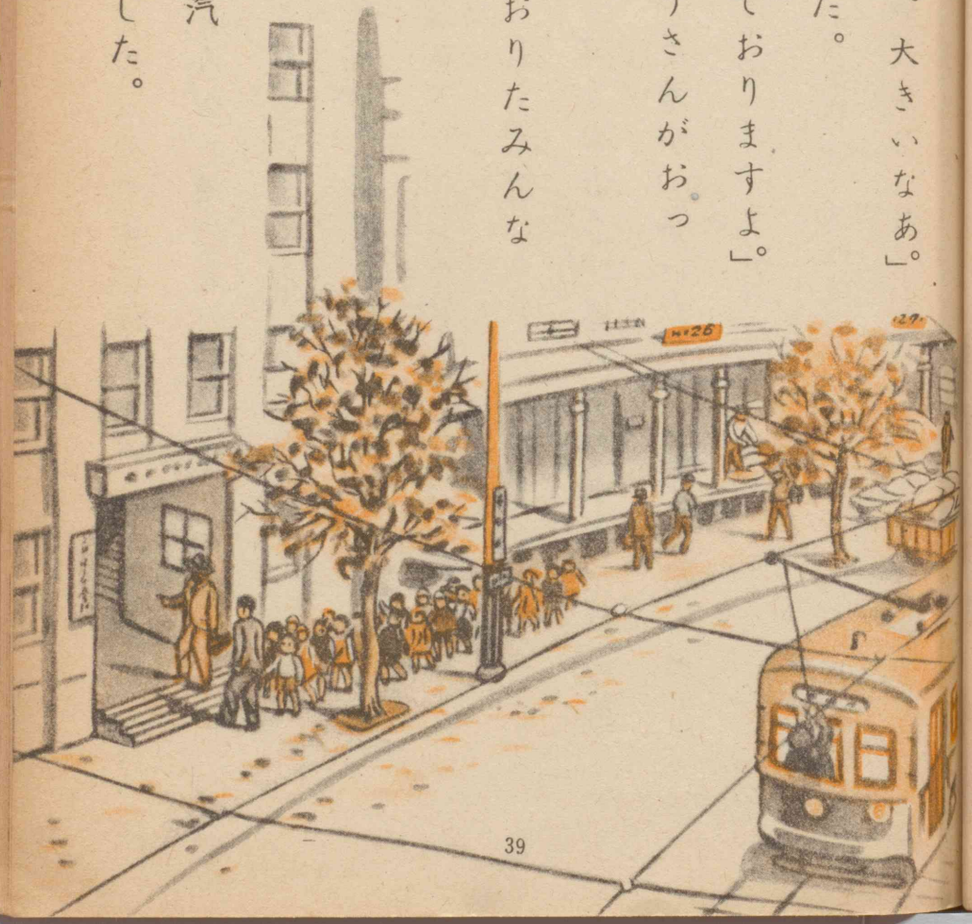
みんなは、電車にのって、はじめにみち子さんのおとうさんのつとめている汽船がいしゃへ行くことにしました。

電車はにぎやかな町の大通りをゆっくりはしって行きます。四つかどのまん中には、こうつうせいりのおまわりさんがたっていて、つぎからつぎと流れるようにつづいてくるいろいろ



なのりものや、おおぜいの人々に通るさしずをしています。
「ピリ、ピリ」とふえをふいて、両手をあげると、今までとまっていた一方の人々や、車がうごき出します。
「みんなの人が、きそくをしっかりまもっているから、こんなにはげしく車が通っても、こうつうじこはめったにないのですよ。」
と、先生がおっしゃいました。
電車は、やく二十分ぐらい、大きなたてもののならんだ町を通ってはしりました。
右がわのまどから、外を見ていたしげる君が、
「あっ、大きな汽船だ。」

「えんとつも見えるよ。大きいなあ。」
とみんなにしらせました。
「みなさん、このつぎでおりますよ。」
と、みち子さんのおとうさんがおっしゃいました。
ぜいかん前で電車をおりたみんなは、プラタナスの木のうえてあるほ道を通って、コンクリート四かいだての汽船がいしゃへはいりました。



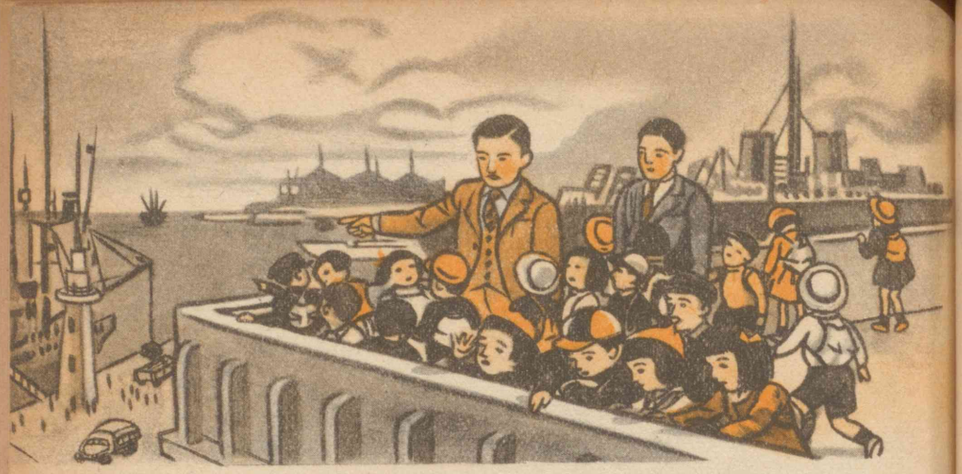
みんなは、かいだんをのぼって三がいのへやへ行きました。

みち子さんのおとうさんが、港のえはがきと、大きな汽船のえはがきをみんなにくださいました。

しげる君は、みち子さんがこのまえ教室へ持ってきて、みんなに見せてくれたえはがきと、おなじものをいただくことができたので、とてもうれしく思いました。すこしやすんでから、かいしゃのおくじょうへ出て、港のようすをながめました。すぐ目の前に大きな港が、今いただいたえはがきのようにきれいに見えます。

「大きな汽船だなあ。」

「いろいろの船があるね。」



みんなは、港のようすを目の前に見て大よろこびです。それからみち子さんのおとうさんのまわりに集まって、いろいろせつめいしていただきました。

「みんなが大きいなあといっている船は、かもつ船といって、にもつをはこぶことを一ばんおもなしごとにしています。だから、船の中はにもつをたくさんつみこめるように考えてつくられています。」

「船は、みんなそのつかいかたによって

つくりかたが考えられているからです。

「おじさん、どのくらいのにもつが、つめるのですか。」

「そうですね。みんなにはなんトンといってもわからないなあ。あの船のにもつはかもつれっ車で、十れっ車ぶんくらいつめるかな。」

「ずいぶん、たくさんつめるのだなあ。」

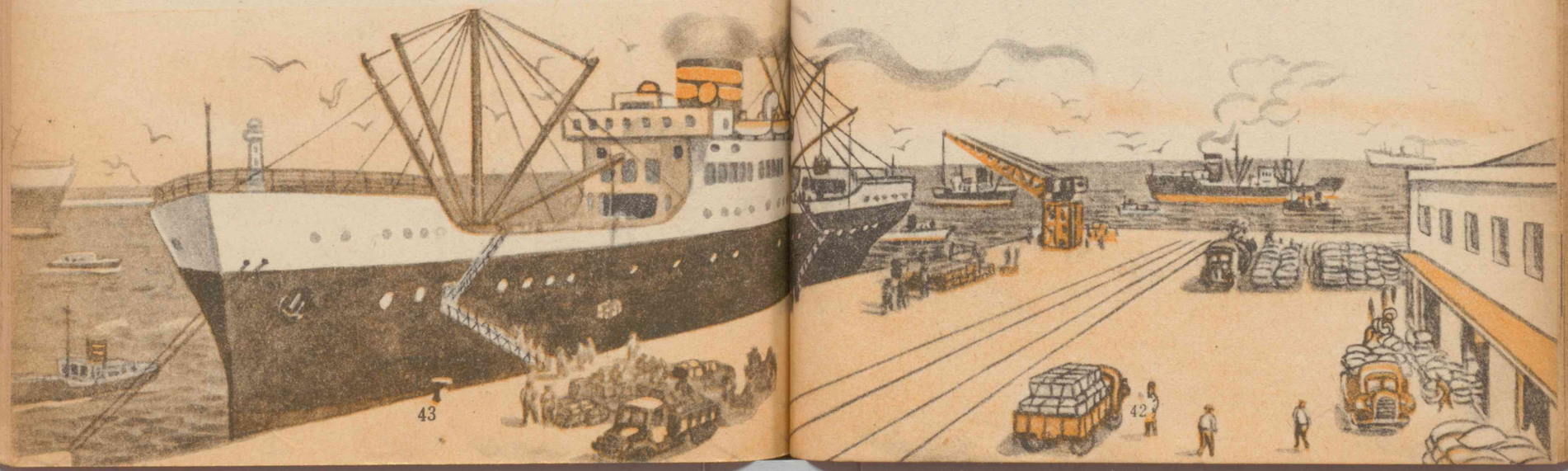
とみんながおどろきました。

「おじさん、そんなにたくさんのにもつをどうしてつんだり、おろしたりするのですか。」

「あとではとばへ行ってみるとよくわかるが、クレーンをつかって、どんどんかたづけますよ。小さな船では荷役といって、つんだりおろしたりするしごとを、人がやっているところもあります。」

「そんなにたくさんのにもつを、どこにおくのですか。」

「おじさん、それは、あそこに見える



そうこに、おくのでしょう。」

あきら君が、はとばにつづいてならんでいるいくむねかの

そうこを指さしながら、こたえました。

「そうです。あのそうこにしまっておくのです。あのそうこのところまで、駅からせんろがしかれてあるでしょう。かもつの駅ができているのですよ。この港からつみこむにもつも、この港におろしてあちこちの土地にお

くるにもつも、みんなあそこでやっているのですよ。」

「おじさん、船とかもつれっ車がなかよくしごとをうけついでいるわけですね。」

と、しげる君がいいました。

先生がにこにこわらっておっしゃいました。

「あのずっとむこうに見える、高いとうのようなものは、なんですか。」

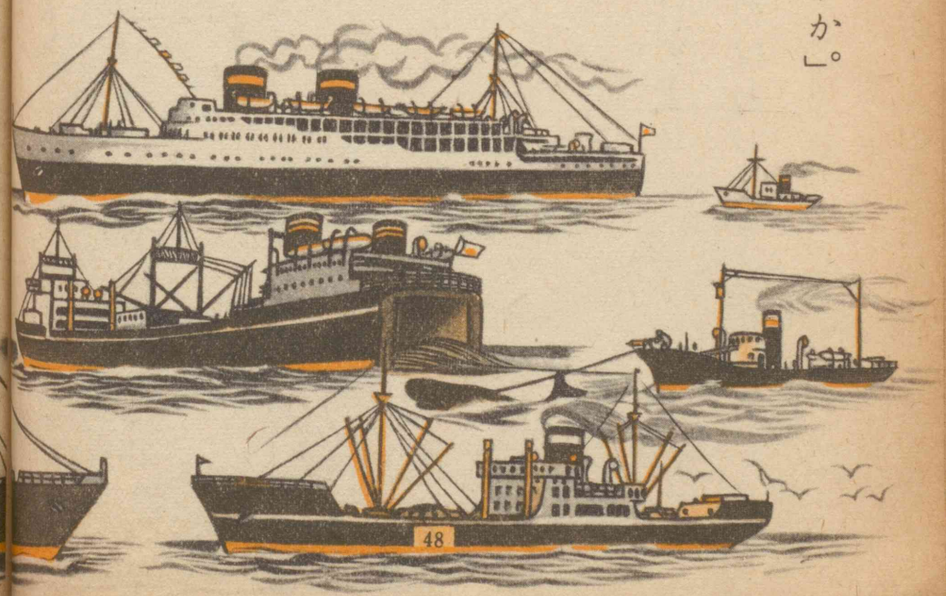
「だれか、わかりませんか。」

「おじさん、とう台でしょう。」
「そうです。とう台にはたらいている人たちのことを、とう台もりといいますが、あの人たちは、あんなさびしそうなところに、まい日、船の安ぜんをいのって、いっしょうけんめいとう台のしごとをしています。
船が星もないまっくらな海を通るような時には、とう台のあかりだけが、目じるしになる

のです。ひろい海のとおくまでわかるように光らせるのだから、とう台の光は、ひじょうに強い光を出すようにつくられています。」
「船にのっている人たちは、どこのとう台かを、なんで見わけるのですか。」
「なかなかよいところに気がつきましたね。とう台は、どこもみんなちがう光の出し方をするので、それによって見わけるわけです。」
しげる君は、とおく波うちぎわのがけの上にたっているとう台を見ながら、とう台もりの人たちのほねおりをありがたいと思いました。

「おじさん、あの船はなんという船ですか。」

「あれは、ゆそう船といって、あぶらをつんではこぶ船です。いまがんぺきによこづけになっているのが、函館まで行ったりきたりしているきゃく船です。すこしとおくの方に見える大きな船は、みんなもよく知っているほげい船です。あのきゃく船は、ごご四時に出ますから、あとでその船の中にはいって見せてもらいましょう。」

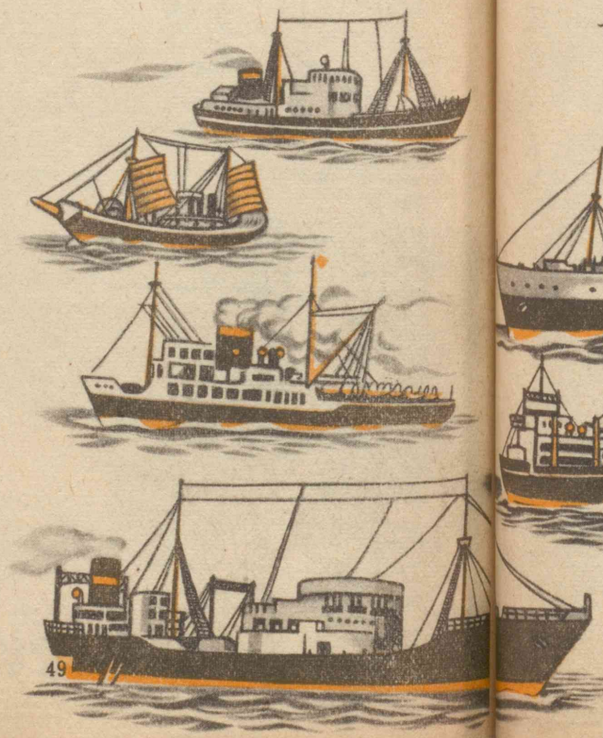


みんなは、「わあっ」といってよろこびました。

「大きな汽船があるので、漁船やはしけはずいぶん小さく見えるでしょう。」

と、先生がそばから、みんなにおっしゃいました。みんなはいろいろなことを話しながら、おくじょうでたのしくおべんとうを食べました。

おわってから、港や船のえをかいた人もいました。



○はとば

みち子さんのおとうさんと、汽船がいしゃのもうひとりの人にあんないしていただいて、はとばへいそぎました。

海岸通りのひろい道を通っていくと、汽船のマストや、ふといえんとつが、すぐ目の前にはっきりと見えてきました。

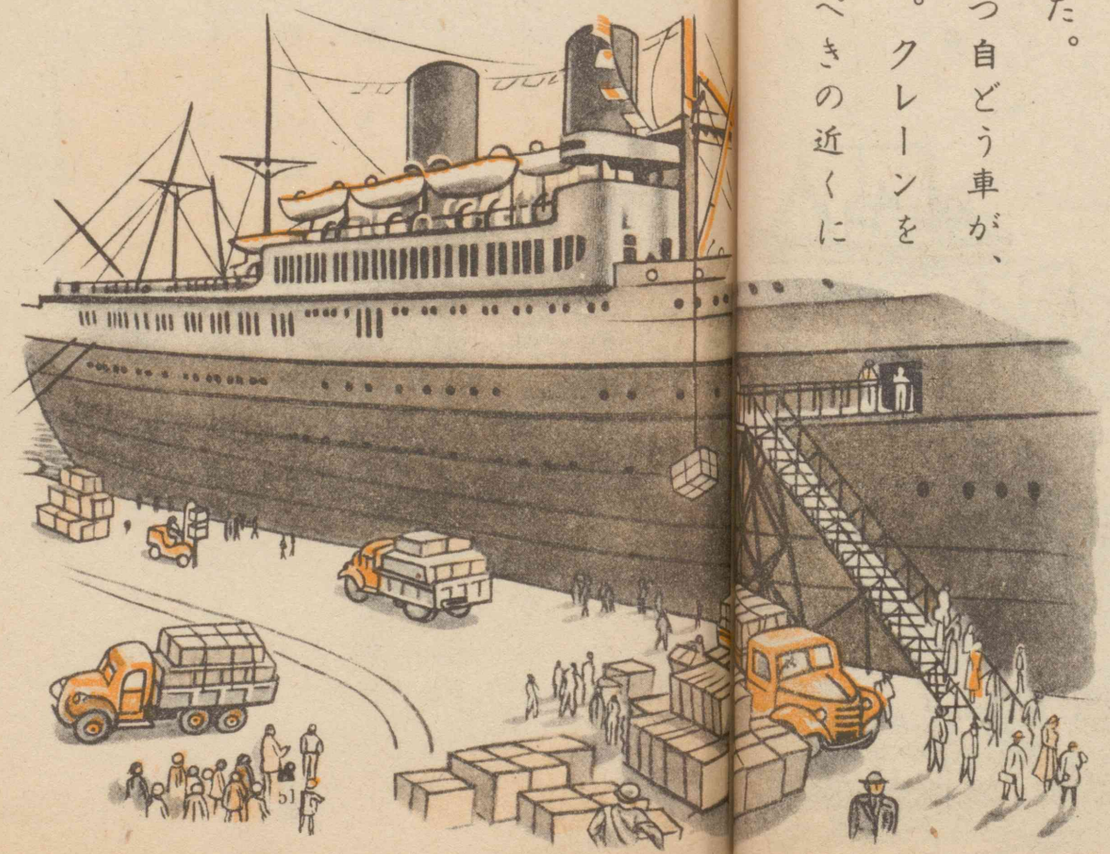
「そばへくると、ずいぶん大きいなあ。」

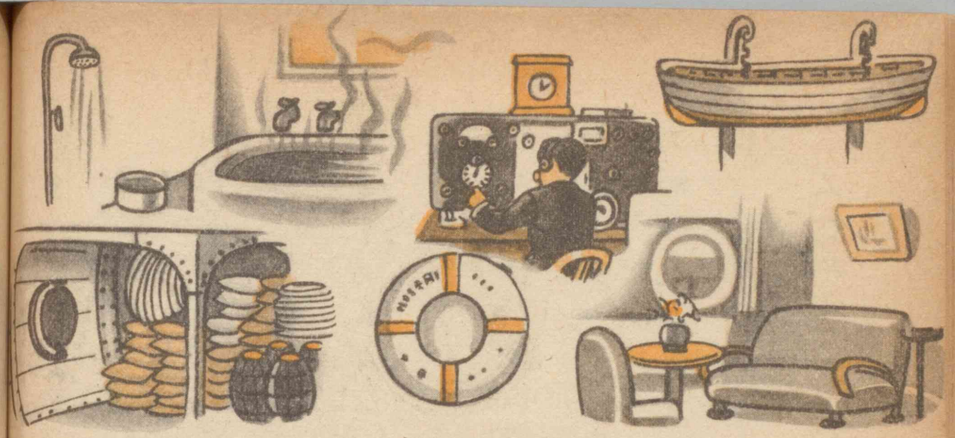
と、しげる君は思いました。

広いはとばには、かもつ自どう車が、ゆっくりうごいています。クレーンをつけた自どう車が、がんぺきの近くにとまっています。

駅にあったものより大きいトラクターでさかんにもつをはこんでいます。みんなはじゃまにならないように、気をつけながら、よこづけになっているきゃく船のそばへよって見ました。

みち子さんのおとうさんが、船いんさんにおねがいしてあ





りましたので　みんなは、汽船のわきにかけてある小さなはしをわたって、すぐ船の中へはいりました。

こんどは、この船の船いんさんにあんないしてもらって、船の中のいろいろなところを見せていただきました。

この船はきゃく船なので、きゃく室がとても、りっぱにつくられていました。船の中のよく室を見て、しげる君はすっかりかんしんしてしまいました。おきゃくのための食どうなどもありました。

かんぱんに出てみました。

五、六人の船いんさんたちが、いっしょうけんめい、かんばんをそうじしていました。

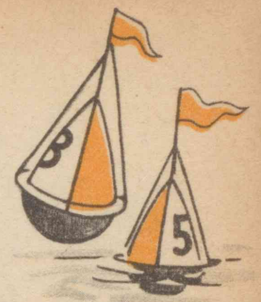
クレーンが、さかんにうごいて、りくにあるにもつを船の中にうつしています。

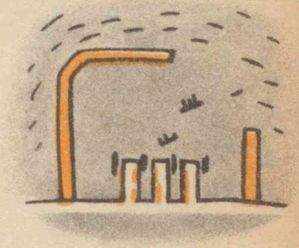
マストに高くあがったはたが、風になびいています。

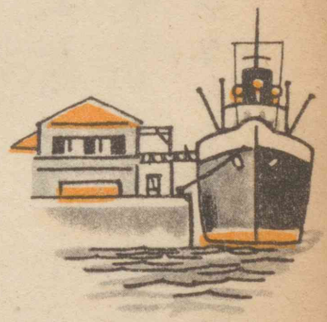
まっ黒なふとい煙とつからは、けむりがさかんに出ています。

エンジンの音が、たえず船いっぱいに小さくひびいて、なんだかうごいているようです。

船の両がわには、ボートがなんそうかついていました。







船いんさんが、

「船がいわにのりあげたり、はげしいあらしにあってたおされるというような、もしもの時にはこのボートにおきゃくをのせるのです。ほかにからだにつけるきゅうめいぶくろというのもあります。もちろんそんな時には、むせん電しんをつかって、すくいをもとめるようになっています。」

と話してくださいました。

船の中のくらしについての話や、港の安ぜんをまもるためにつくられているものについても、いろいろ話していただきました。そろそろ、おきゃくさんがのりこんでくるというので、しげる君たちは船の人たちにお礼をいって、出ることにしました。

おりてから、一つのそうこの入口が大きくあいていたので、しげる君たちは、その中を外から見せていただきました。きれいにづくりされた大きい木のはこが、たくさんつんでありました。

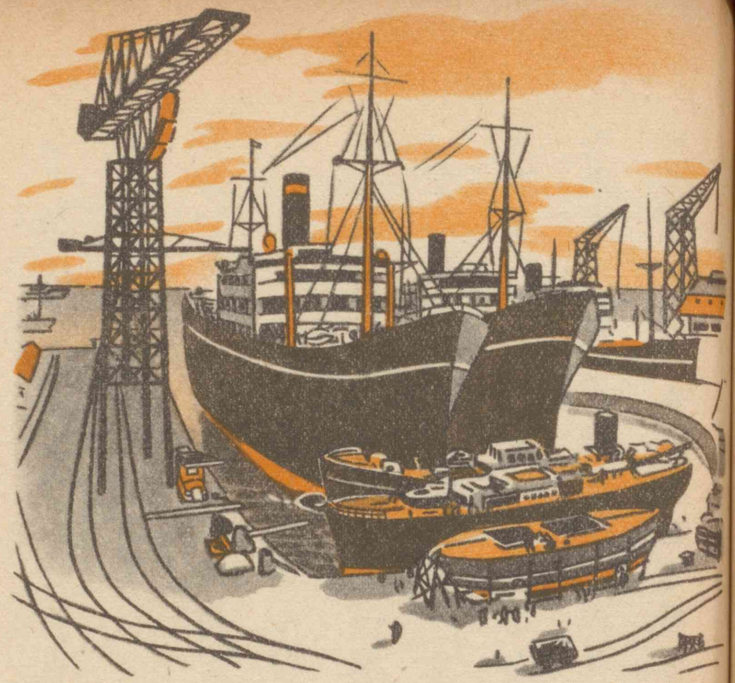
「これは、外国へおくり出すおりものです。今、ここにあるのはきぬおりものがおおいようです」。

と、汽船がいしゃの人がおしえてくださいました。

「ぼくの町にある、きぬおりもの工場でつくられたものも、この中にあるかもしれない。」

と、しげる君は思いました。そして、きょ年の夏、いなかへ行ってかいこのまゆを見たことを思いだしました。

帰りには、港のぞう船所の方へまわって見ました。



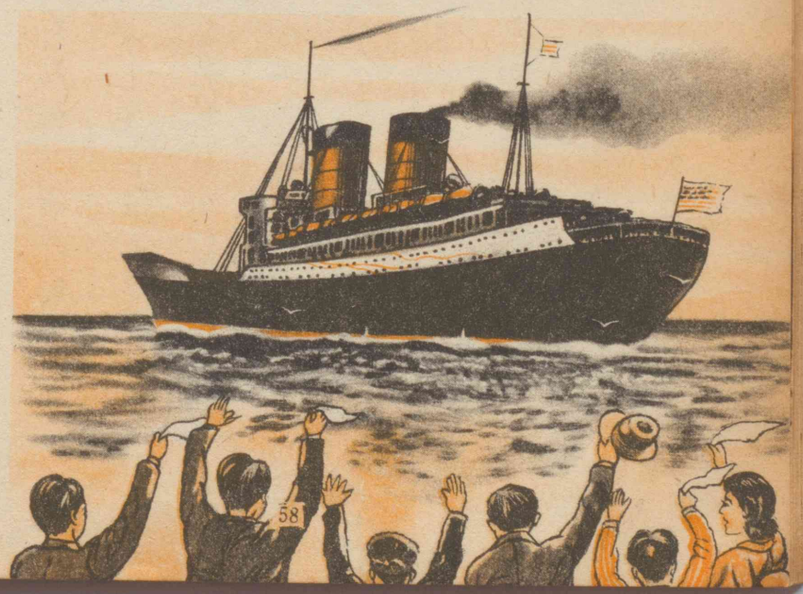
大きなかもつ船が、ドックにひきあげられていて、おおぜいの人たちが、その船のしゅうぜんをしていました。

ふとい くぎでもうちこむのでしょうか。「カンカンカン」という音が、ひっきりなしにしています。

はとばの方から、「ボーボー」とドラの音がきこえてきました。汽船が出ぱんするのでしょう。ふりかえって見る

とさっきの汽船が、がんぺきからはなれて、白い波のおをひきながら、しずかに港を出て行くところでした。見おくりの人たちが、まだハンカチをふっています。ぞう船所を見てから、みんなは、みち子さんのおとうさんたちにお礼をいって、駅へむかいました。

帰りの電車をまつ駅のまちあい所の中で、みんなはきょうの見学について、いろいろなことを話しあいました。



みち子「いろいろ見た船の中で、私はきゃく船が一ばんいいと思ったわ。」

あきら「ぼくは、かもつ船が一ばんいいな。たくさんにもつをつんで、みんなのために役にたつのだから。」

しげる「それは、きゃく船だってほかの船だって、おなじだとぼくは思うよ。いろいろな船は、みんなそのつかいみちによって、役にたつようにできているのだもの。」

先生「それは、しげる君のいうとおりだね。だが、船にたくさんのにもつがつめるのには、みんなおどろいたでしょう。」

あきら「先生、船が汽車のように早いとべんりですね。」

先　生「そうだね、しかしこれからはだんだんくふうされて、早くはしる船がつくられるようになるでしょう。日本でつくられた品ものが、外国におくられたり、外国のものが日本にはこばれたりするのに、船はなくてはならない大せつなものだからね。」

しげる「先生、きょうはとてもおもしろくてよかったと思います。はじめにきめたけんきゅうするもんだいが

みんなわかったような気がします。」

みち子「私は早く船と港のあそびをはじめたくなりました。」

しげる「あしたからやらせてください。」

いつのまにか、みんなが先生のまわりに集まって、船と港のあそびについて話しあっています。

あきら「先生、かえったら一ばんさきに、おせわになった方々にお礼の手紙を出したいと思います。」

先　生「それはいいことだ、みんなでそうだんして出すようにしましょう。」

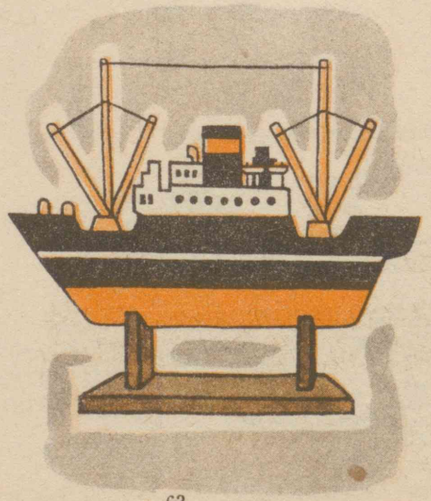
このとき、駅のかくせいきが、さかえ町行きのかいさつが

まもなくはじまることをしらせました。みんなは、ならんで
わすれものがないか、もう一どたしかめました。

船と港あそび

しげる君の組では、見学したことをもとにして、船と港の
あそびのしかたを、みんなでそうだんしています。
「どんな船をつくりましょうか。」
と、先生がおっしゃいましたので、みんなは、
「あそびがおもしろくできるように、いろいろなしゅるいの
船を、たくさんつくりたい。」
「僕は、大きなていき船をつくりたい。」

「わたしは、水さきあんないをする船をつくりたいわ。」
「ぼくは、かもつ船だ。」
などと、みんなはいろいろなしゅるい
の船の名まえをあげました。先生が、
「しっかりじゅんびをしなさい。」
とおっしゃって、船をつくるどだい
になる木を、めいめいにわたしてく
ださいました。
みんなは、見学してしゃせいして
きた船のえや、えはがきや本の中から、自分のつくる船のえ
をさがして、つくる用意をはじめています。つくる船のえを



ボール紙にかいてきりぬき、木にそれをたてて、船の形をとるようにくふうしている人もいます。先生が

「みんなの集めたえを、ぜんぶよせてせいりしたら、船のてんらん会もできるね。」

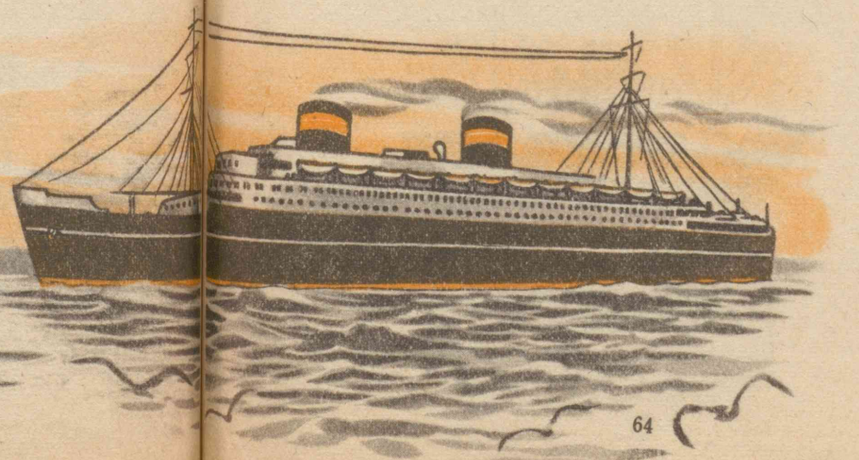
とおっしゃいました。

あきら君は、

「むかしからの船のえを、だんだんりっぱになったじゅんじょに集めたらいい。」

という意見を出しました。

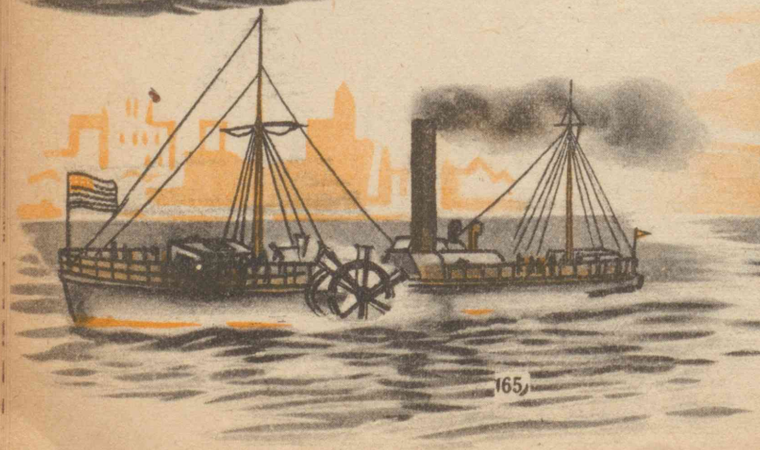
「日本にある船と外国の船とをくらべるようなことはどうですか。」



という人もいました。みんないい意見だと先生がおほめになりました。用意は、なかなか時間がかかりますが、みんなはいっしょうけんめいです。

「ボー、ボー、すこしそこをどいてください。」

早くできたものは、自分の船を教室のゆか



で、おしまわしはじめました。

「ぼくは水さきあんないをする船ですよ。みんなあとからいらっしゃい。ボーボー」。

などといっている人もあります。しげる君が、

「港のいろいろなものをつくってからでないとおもしろくないよ」。

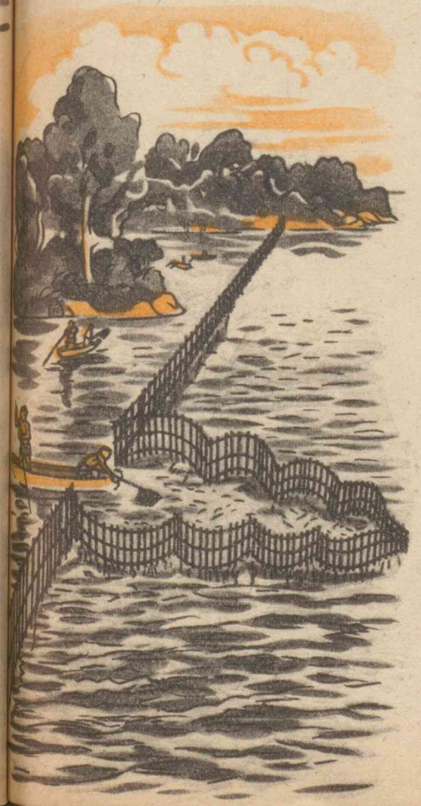
といったので、みんながさんせいして、早くできたものだけが、教室を見てきた港のようにつくるくふうをはじめました。ひっこみせんのかもつ駅ではたらく人になる人や、そうこがかりの人などには、みんながかわるがわるなることにきめました。とう台やふひょうや、船のとまる場所や、ぼうはていなどもそうだんしてつくりました。そろそろみんなの船ができたので、にぎやかにはじめました。自分でドラの音をまねながら、

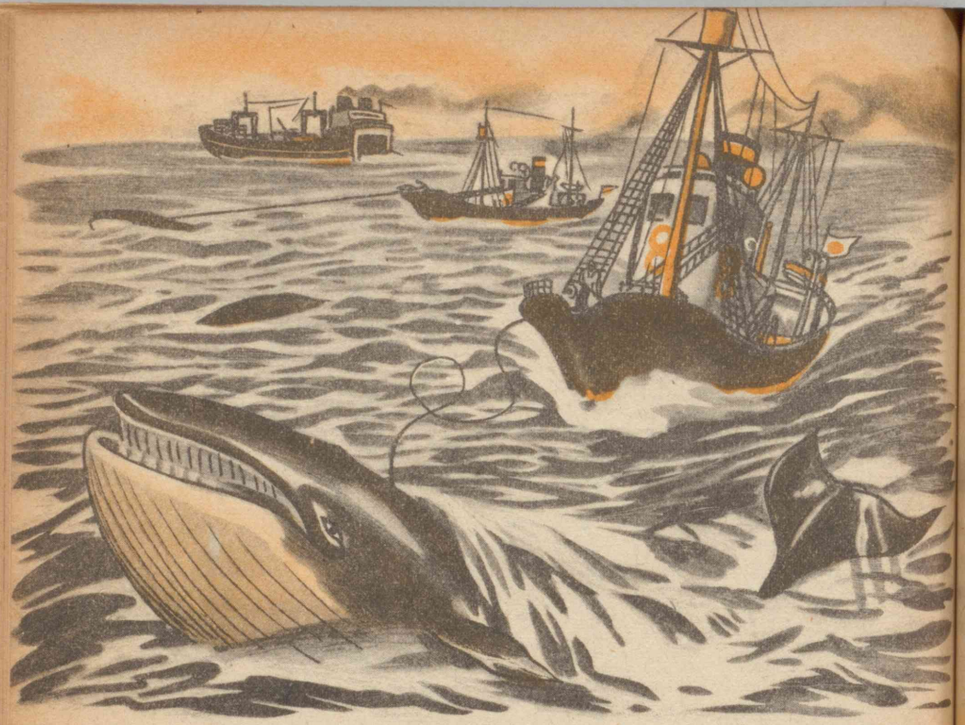
「出ぱんですよ。早くのってください」。

などといっている人もいます。かもつのつみおろしをまねてやってくる人もあります。

「くじらで船がおもいよ」。

などといって、港へはいってくる人もいます。先生が、
「どこでどうやってとってきましたか。」
とおききになりましたので、いままでとくいになっていたま
さお君はすっかりこまってしまいました。そこで先生がみん
なにくじらをとることや、またほかのさかなのとりかたをお
もしろくお話になりました。
つりでとるしかた、つ
きぼう、あみでとるしか
たなど、とてもおもしろ
いと思いました。





あきら君が
「なん日もこう海するから、
水や、食べものをたくさ
ん用意しますよ。」
といいながらそのまねをは
じめました。先生が、にこ
にこわらいながら、
「船のせいかつはたのしみ
が少ないから、レコード
や、本などもたくさん持っ
て行きなさいよ。」

と話していらっしゃいます。

「わたしの船は、たくさん、さとうをつんだ外国船よ。早くおろして、日本じゅうにおくってね。」

と、みち子さんが、元気よくいっています。

ひっこみせんのかもつがかりをやっているしげる君が、

「うけついではこぶのだから、リレーみたいだなあ。」

といそがしそうです。そうこがかりのかず子さんが、

「みち子さん、こんどはこのにもつを外国へはこんでください。」といって、「おりもの」とかいた小さなつつみを、わたしています。しげる君たちの組は、みんながしごとをなかよくうけもって、とてもおもしろそうにやっています。

二　かもつとかもつれっ車

うれしいおくりもの

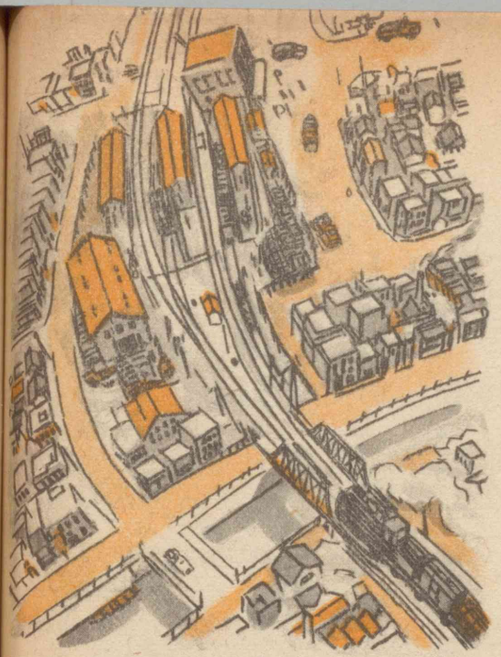
正月もまぢかいある日のごごでした。

「ゆうびん」といってゆうびんやさんが、しげる君のうちに手紙をくばっていきました。しげる君がすぐ、おかあさんにおとどけすると、

「おや、これはわか山のおじさんからではありませんか。」

といってひらいてみました。

手紙には、みかんを汽車でおくったことや、おじさんが一月の五日の朝八時に、こちらにおいでになることなどが書いてありました。



しげる君は、

「うれしいな、おかあさん、わか山のみかんはおいしいでしょう。早くつかないかな。」

といってよろこびました。

「さあ、手紙に二十二日におくったと書いてあるから、もうすぐつくでしょう。」

「汽車につんでおくるのでは、みかんがいたんでしまわないかしら。」

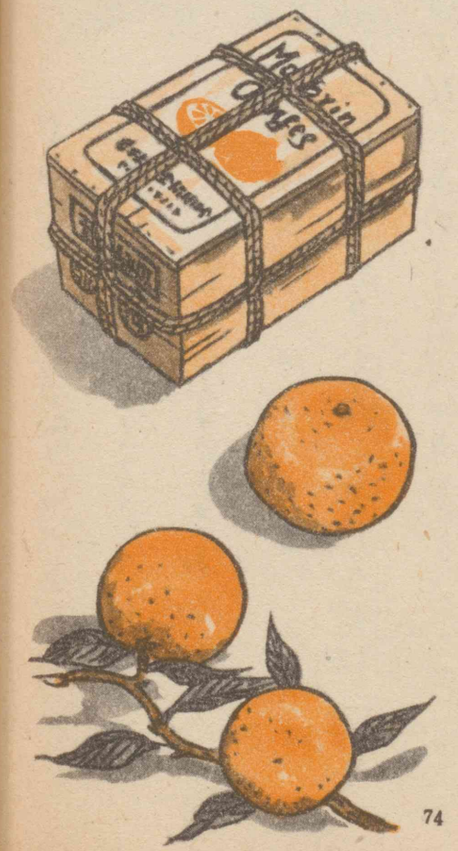
「だいじょうぶよ。ちゃんとはこづめにして、おくってくださるのでしょうから。」

「おかあさん、今かもつ駅はにもつでいっぱいですよ、まちがいなくとどくかしら。」

「しんぱいいりませんよ。駅の人や、うんそうがいしゃの人たちが、きちんとしごとをしていてくださるのですもの。」

こんな話をしているうちに、いつのまにか、夕がたになり

ました。おとうさんも、おねえさんも帰ってきました。うち
じゅうの人が、うれしいたよりを見てよろこびました。
おとうさんが、
「二十二日におくったのでは、あと二、三日でとどくね。し
げる、これでは
お正月がすこし
早くきそうだね。」
といって、わらい
ました。
「おとうさん、お
じさんがいらっ



しゃったら、みんなで、えいがを見ましょうよ。きっとお
よろこびになるわ。」
とおねえさんがいいました。
「それがいいわ。おじさんのうちの正作さんは、こんど、十
二さいになるのね、おとし玉に本ばこでも買って、おくっ
てあげましょうか。」
と、おかあさんがいいました。
「うん、そうしよう。」「それがいいわ。」
と、うちじゅうの人が、さんせいしました。
おとうさんが夕食のあとで、わか山のいなかのようすを、
いろいろ話してくださいました。

みかんは、わか山とか、しずおかのような山ぞいのあたたかいところに、よくできるわけも話してくださいました。またむかしとちがって、いまでは、汽車や船がべんりになったので、早く、とおくの方にまで、くさらせずにはこべることなどを、おもしろく話してくださいました。

十二月二十七日のひるごろでした。

「大山さん、小にもつです。これに、はんをおしてください。」

といって、うんそうがいしゃの人が、リヤカーで、みかんをとどけてくれました。

「どうも、ごくろうさま。ちょっと、

おまちください。」

といって、おかあさんが、はんを持ってきて、かきつけにおしました。

「おかあさん、うんぱんちんをはらうのでしょう。」

と、しげる君がいいました。

「いえ、これは、たくあつかいですから、おくった方からいただいてあるのです。さようなら。」

といって、はいたつのおじさんは、いそがしそうに帰っていきました。

しげる君は、木のにふだをめずらしそうに、ながめていました。

おかあさんが

「早いものですね。わか山から五日でとどくのですものね。手紙と、二日ちがいできたわ。こんなに早ければ、くだものようなものでも、あんしんしておくれるわね。」

とおっしゃいました。

しげる君は、とおいわか山がなんだか、すぐ近くにあるように思えてなりませんでした。

おまちください。」

といって、おかあさんが、はんを持ってきて、かぎつけにおしました。

「おかあさん、うんぱんちんをはらうのでしょう。」

と、しげる君がいいました。

「いえ、これは、たくあつかいですから、おくった方からいただいてあるのです。さようなら。」

といって、はいたつのおじさんは、いそがしそうに帰っていきました。

しげる君は、木のにふだをめずらしそうに、ながめていました。

おかあさんが

「早いものですね。わか山から五日でとどくのですものね。手紙と、二日ちがいできたわ。こんなに早ければ、くだものやようなものでも、あんしんしておくれるわね。」

とおっしゃいました。

しげる君は、とおいわか山がなんだか、すぐ近くにあるように思えてなりませんでした。

夜、おとうさんといっしょに、にもつをひらきました。

汽車にゆれても、だいじょうぶなように、はこづめにして、じょうずにづくりしてありました。

中から、おいしそうなみかんが、たくさん出てきました。

みんなで、少しいただいてから、あとはお正月のごちそうにしまっておきました。

かもつ駅

きょうはおとうさんといっしょに、お正月の買いものに行きました。わか山の正作さんにおくる、本ばこも買ってきました。帰ってきてから、すぐ、にづくりをしました。

汽車にゆれても、いたまないように、いろいろくふうしてつくりました。

木のにふだをつけ、あてなもかきいれました。

「さあ、しげる、これからおとうさんといっしょに、駅まで持っていって、汽車ではこんでもらおう。」

とおっしゃいました。

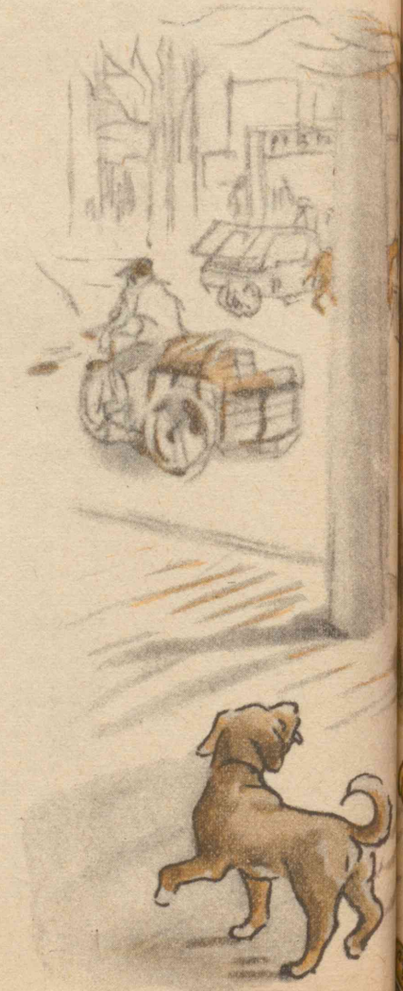
「はい、行きましょう」。
と、しげる君は、うれしそうにこたえました。
「おとうさん、このにもつのうんちんは、いくらかかりますか」。
「そうだね。どのくらいめかたがあるかね。

しげる、かつげるかな、かもつのうんちんは、めかたと、とどけさきがとおいか、近いかできまるので、ちょっとわからないね。駅でしらべてもらおう」。

とおっしゃいました。
しげる君は、「うんとこさ」と、やっとかつぎました。
「おや、しげるさんも力もちになったわね。お正月がきて、おもち

をいただくと、もっと力もちになれるわ。」
と、おかあさんがおっしゃいました。
ふたりは、にもつを持って出かけました。
すこしのにもつでも、手にさげてあるいてみると大へんおもかった。しげる君は、手がつかれ、からだじゅうがほてってきました。
駅にむかってにもつをつんだトラックが、いきおいよくはしって行きます。駅

の方から、はしってくるのもあります。リヤカー、牛車、馬車なども、いっぱいにもつをつんで行きます。いつもは、あまり気づかずにいるのですが、きょうはとくべつ目についたとみえて、
「おとうさん、ずいぶんいろいろなものがはこばれていますね、トラックは一ばんたくさんにもつをつんでいますが、らくそうにはしっていますね。」



といいました。するとおとうさんが、
「そうだ。りくの上をはしるものでは、汽車、電車、トラックなどが、一ばんだろう。けれども、つむにもつや、はこぶ場所によって、リヤカー、牛車、馬車などもなかなかだいじなやくめをしているよ。」
とおっしゃいました。
やがて、駅につきました。かいさつ口のうらてに、小にもつあつかいじょと書いたところがあります。
「このにもつをおねがいします。」
と、おとうさんが駅の人にいいました。
「はい、駅どめですか。」

と駅の人がこたえました。
「いや、たくあつかいにしてください。」
「はい、ちょっとお待ちください。」
といって、駅の人はめかたをはかりました。
それから、かきつけになにか書いて、
「では、二百五十えんいただきます。あしたの朝の汽車につみこみますから、五、六日でつ

ぐでしょう。」

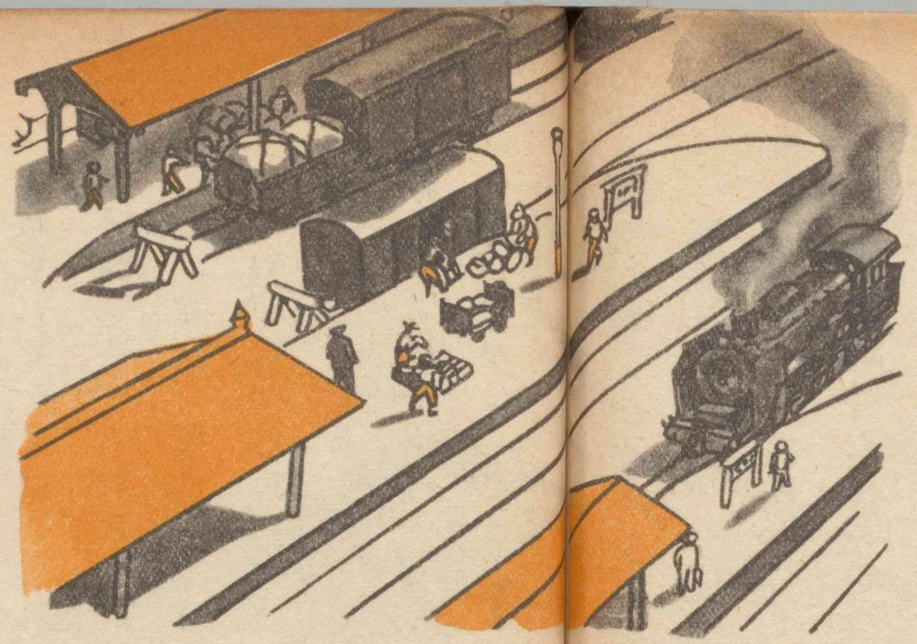
といいました。

おとうさんは、りょうきんをはらいました。

かもつ駅には、ほかにもたくさんのにもつが、山のようにつんでありました。

駅の人たちが、手わけをして、いろいろしごとをしていました。にもつをよりわけて、かもつホームにはこぶ人もいました。

むこうの方には、今かもつれっ車がついたところです。



駅の人や、うんそうがいしゃの人たちが、かきつけをしらべながら、にもつのつみおろしをしています。

ひっこみせんには、はこか車が一だいとまっていて、それにたわらをつんでいます。

「おとうさん、あのたわらにはなにがはいっているのですか。」

と、たずねました。

「あれは、町はずれにある山下ひりょう工場で、つくったひ

りょうだろう。」

「どこにおくるのですか。」

「ひりょうだから、いなかにおくるのだろう。」

「あっ、むこうから、馬車が、きかいをはこんできましたよ。あれもいなかにはこばれるのですか。」

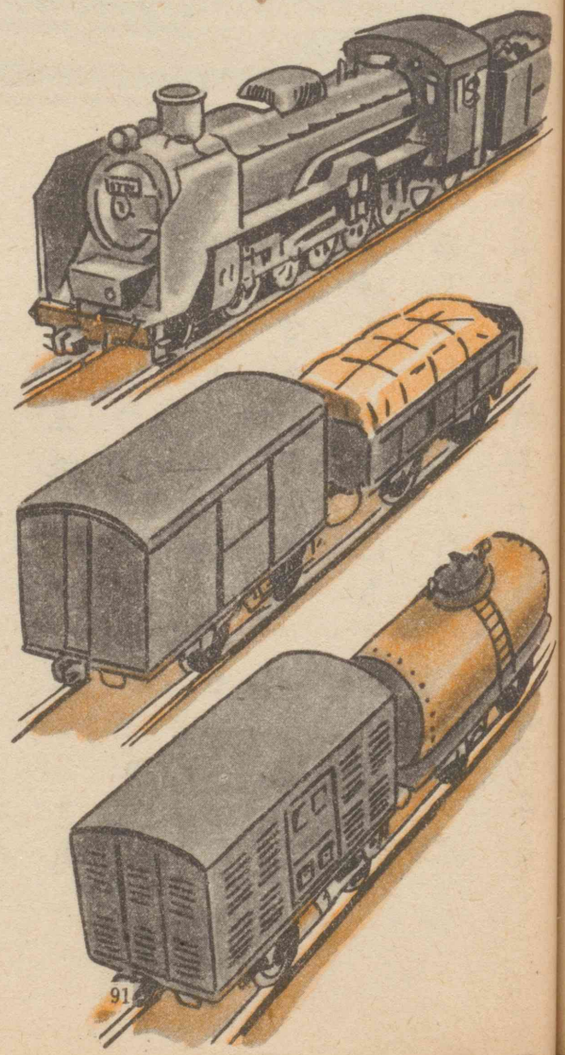
「そうだろう。あれはなわをなうきかいらしいから。」

しげる君は、町でつくられるいろいろなものが、こうしていなかや、ほかの町におくられていくようすを、目をかがやかせて、じっと見ていました。

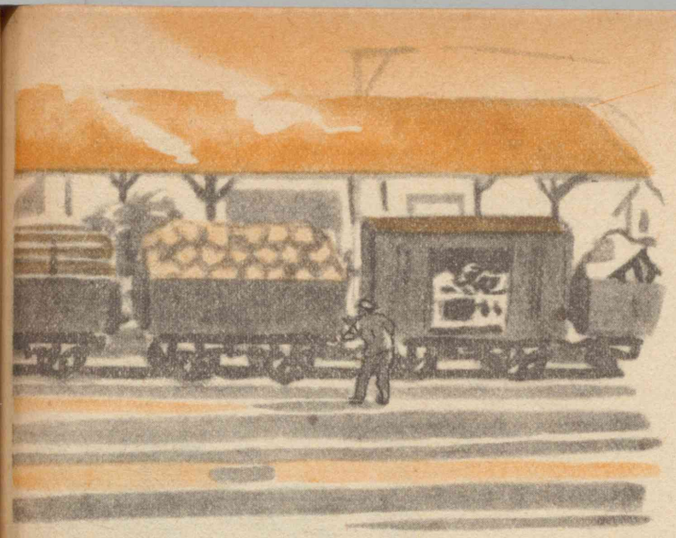
また、あの一つのきかん車が長いいくつものか車を、ひっぱる大きな力におどろきました。

か車にも、大きいもの、小さいもの、はこか車、やねのないか車、風の通るようになっているか車　動ぶつをはこぶか車など、いろいろなものがあることに気づきました。

「おとうさん、ぼく、この駅からどんなものがつみだされる



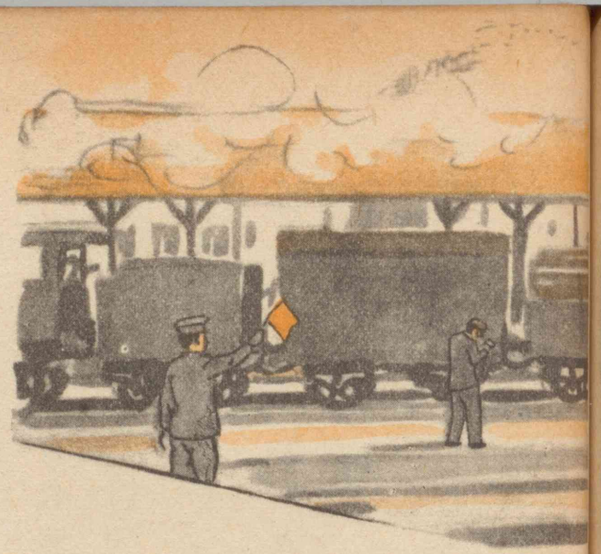
かしらべてみたいな。それからかもつれっ車がどんなにできているかも。」



「それは、おもしろいだろう。つみ出すにもつばかりでなく、この町によその土地から、はこびこまれるものも、しらべるといいね。」

「そうしよう。では、あそこにいって見てきましょう。」

「しげる、きょうはもうおそいから、あしたからにしたらいいだろう。ほら、電気もついたし、駅の人も



タがたはいそがしいから。」

「そうですね。」

その時、ポポーガッシャン、ガッシャンと、きゃく車がはいってきました。たくさんの人々が、のりおりをしています。やがてカバンをさげた人、ふろしきづつみを持った人たちが、さむそうに、がいとうのえりをたてて、いそぎ足で、かいさつ口から出て行きました。

タがたの駅は、いっそうこんざつしていました。

ふたりは、いろいろ、話しあいながら、家に帰りました。

駅のつみに、おろしに、しらべ

きのうは、みんなで駅に行って、いろいろな人から駅のことをおしえていただいて、よく見てきました。

きょうは、しげる君の家に、四人の友だちが集まって、さかんにべんきょうをつづけています。

「これで、つみにしらべの表ができあがったね。」

「おくすりのえが、うまく書けなかったけれど、ほかはじょうずにできたね。」

「ぼくはこのしらべをするまで、町からのつみになど一つもしらなかったけれど、こんどはよくわかりました。」

「あら、おかしいわ。自分で、自分をほめたりして。」

といって、きよ子さんがわらいました。

「町の人たちは、お米や、やさいなどをのうかの人たちにつくってもらっているけれど、そのかわりに、のうかの人のだいじなものをつくってあげているのだね。」

「そうだね。こんどは、わたしたちの町によその土地からどんなものがはこばれてくるかをしらべて表をつくろうよ。」
「そうね。でもわたしはもうなにがはこばれてくるかしらべてあるわ。ほら、これよ。」
きよ子さんは、こういって、ちょうめんをみんなに見せました。
「よくしらべてあるね。やっぱり、お米、材木、まき、炭などがおおいんだね。」
「それに、今までしらなかった石炭、すな、石、セメント、鉄材などもあるね。」
「まだあるよ。きよ子さん、だいじなものをぬかしたね。み

かん。ぼくの家では、このあいだ、わか山からおくってもらったよ。」
「それから、おやさいもぬけているでしょう。」
「おやさいはおもにトラックで、近くの村からはこばれるのですって。」
「でも、汽車でもはこぶでしょう。」

「汽車ではこばれてくるものをぜんぶ書いたら、それこそ大へんよ。五十も百もあるわよ。だから、その中でたくさんはこばれてくるものだけにしなければ、かぎりがないわ。」

みんなは、しんけんになって、はこびこまれてくる品ものについて話しあいました。

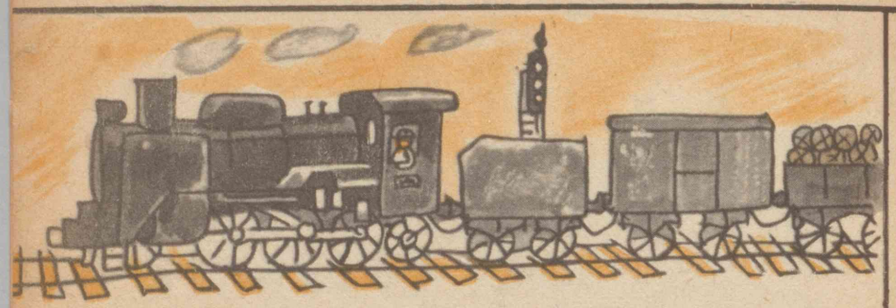
わからないことは、もう一ど、駅に行ってしらべることにしました。

四人の人が、力をあわせて、しごとをしたので、きれいに早くできあがりました。

三学きがはじまったら、組の人たちに発表することになりました。

えきからのつみにしらべ

三年　森しげる　小川きよ
山本ひで子　大友あきら



ひりょう

のうぐ

なべやかま

くすり

しょくりょう

おりもの

家ぐ

おじさんの出むかえ

うれしいお正月がきました。しげる君は、まいにち元気よくあそんでいます。いなかからおくってきたみかんが、家じゅうの人をよろこばせてくれました。

四日の夕ごはんのときでした。おかあさんが、

「あしたの朝、わか山のおじさんがおつきになるのよ。しげるさん、おむかえに行っていらっしゃいね。」

とおっしゃいました。

「わたしも行くわ。八時におつきになるのでしたね。」

と、おねえさんがいいました。

五日の朝は、よくはれわたっていました。しもがたくさんおりたらしく、どこの家のやねも、白く見えました。

しげる君と、おねえさんは、したくをして、家を出ました。駅についたら、ちょうど七時五十分のくだりれっ車がついたところでした。

「あと、十分たつと、おじさんののっているのぼりれっ車がつくのよ。」

と、おねえさんがいいました。

かもつ駅を見ると、年のくれにあったほどのにもつは、ありませんでした。

「しげる君！」

と、うしろからよびかけた人がいました。ふりかえって見ると、あきら君でした。

「どこへ行くの。」

「きょうは、おかあさんと、いなかへ行くの。」

「いま、汽車が出てしまったよ。」

「汽車で、行くのじゃないよ。」

「あそこから、電車にのって行くのだよ。ほら、港町にえんそくにいったことがあるでしょう。」

「じゃ、むこうのかいさつ口からはいるんだね。」

「そう、早くおかあさんいらっしゃらないかな。」

あきら君は、まちどおしそうに、ふりかえって見ました。

みると、おばさんがいそぎあしでいらっしゃいました。

「おや、しげるさんたちね。どちらへ。」

「ぼくたち、いなかのおじさんがいらっしゃるのをまっているのです。こんどののぼりれっ車でいらっしゃるのです。」

「ああそう。では、もうすぐね。ごめんください。」

といって、電車ののりばの方へ行かれました。

見ると、電車にのる人も、かなりいるようでした。

駅のかくせいきが、「まもなく、二番せんにのぼりれっ車がつきます。白い線からさがっておまちください。」としらせていました。

二、三人の人が、いそいでホームへかけて行きました。

やがて、ポポーと汽てきを、空一ぱいにひびかせて、汽車がホームへはいってきました。

「おじさん、すぐ見つかるかしら。」

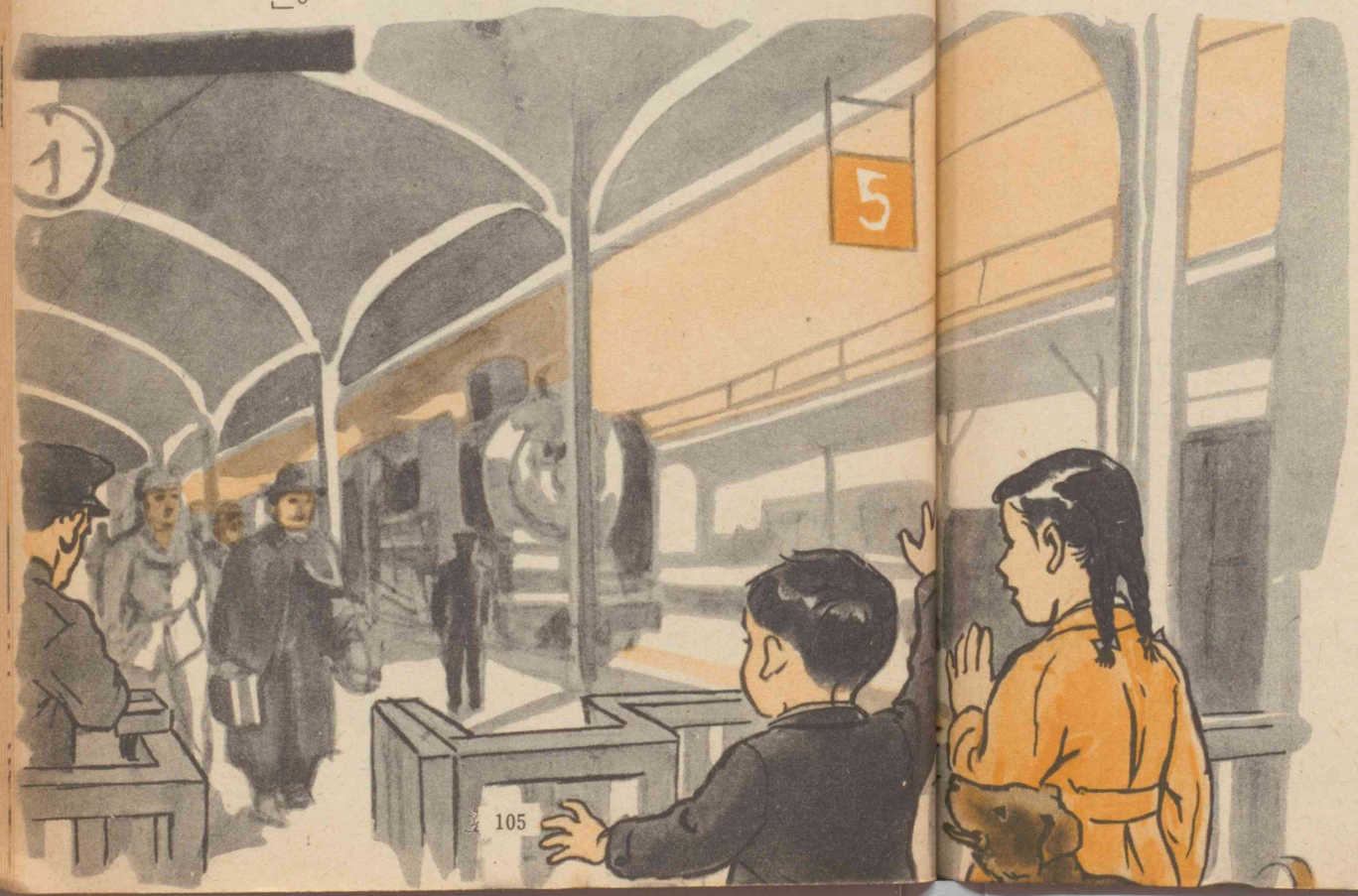
「だいじょうぶよ。ここで、ひとりひとり見ていれば。」

と、おねえさんがいいました。

やがて、汽車がつきました。

「さかえ(駅)、さかえ(駅)。」

大ぜいの人が、どやどやとおりてきました。



「あっ、おじさんだ。」

しげる君が、手をふってさけぶと、むこうでにもつをさげたおじさんも、にこにこしながら手をふりました。

やがて、かいさつ口を通って、近づいていらっしゃいました。

「やあ、しげる君によし子さんか。大きくなったね。みんなじょうぶかね。」

「はい。おじさん、おみかんありがとう。」

「いやー、それよりうちの正作が、本ばこをおくっていただいて、大そうよろこんでいたよ。ありがとう。」

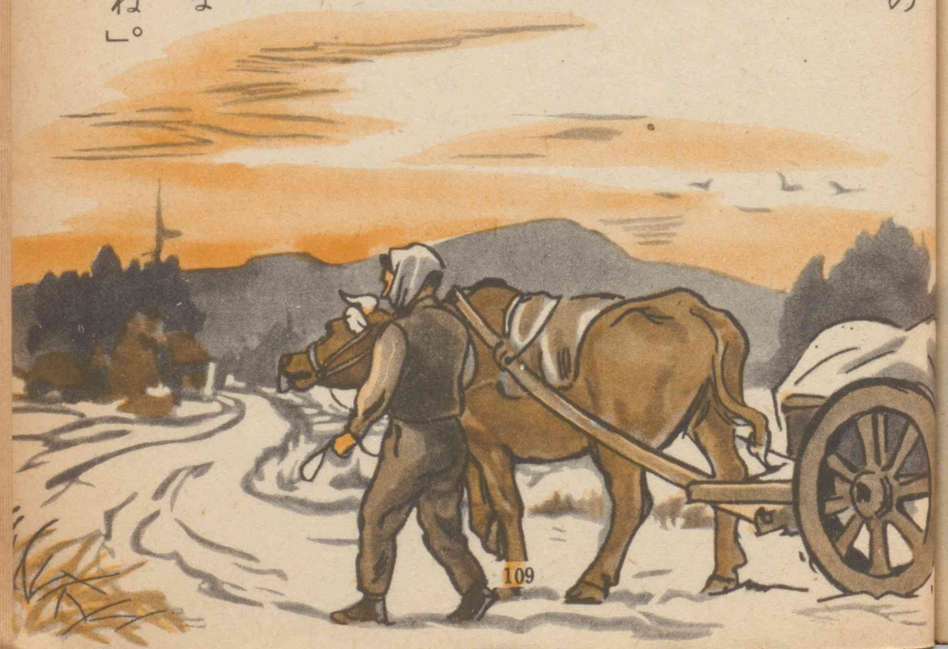
「あっ、もうついたのですか、早いものですね。」

「さあ、行きましょう。やっぱり、町はにぎやかだね。町は、ますますべんりになるね。」

おや、又ここからあたらしいバスが出るようになったね。

「おじさん、にもつを持ちましょう。」
「いや、大じょうぶだよ。汽車もらくになって、すわってきたから。」
「でも、やこうでしたから、おつかれでしょう。わたしが、お持ちするわ。」
「そうかね、では一つたのもうかね。」
「おじさん、いく時間のっていたのですか。」
「そうだね、ゆうべ八時に汽車が出たのだから、十二時間かね。」
「ずいぶん、のったのですね。」
こんな話をしながら、家へいそぎました。

みちみち、おじさんが、いなかののりものや、むかしののりもののことを話してくださいました。
「おじさんのいなかは、駅から二時間もはいったところだから、まったくふべんだよ。そこで、近くの村の人々が、そうだんしあって、こんど、バスを通すようにきめましたよ。きっとことじゅうにはできるでしょう。そうなれば、今よりずっとべんりになるね。」



「ものをうんぱんするには、どうしているのですか。」

「きょ年、村のきょうどうくみあいで、一台トラックを買ったし、近くの町からも、トラックがはいってくるよ。だから、むかしのように手車で、人げんがなんでもひっぱるということは少なくなった。でも、やっぱりリヤカー、牛車、馬車はなくてはならないものだよ。」

「じゃ、むかしは、大そうふべんだったでしょうね。」

「それは、大へんなものだった、なにもかも人げんの力ではこんだものだ。だい一、道がわるくてね。冬などは、ぬかってあるけなかったよ。」

「ほそうしてなかったのですね。」

「ほそうどころか、じゃりさえしいてなかった。むかし、人は村からよそへ出かけるとか、ものをとおくにはこぶということも少なかった。なんでも自分たちで、こしらえてまにあわせていたのだよ。だからのりものも、今ほどさかんではなくても、まにあったのだろう。」

こんな話をしているうちに、

さかえ町で、一ばんにぎやかな、大通りの四つかどにきました。

ピリピリピリー。こうつうじゅんさが、手をあげて、こうつうせいりをしています。たくさんの人や車が、ひとりのじゅんさのさしずで、きそくただしく行ききしています。

みんなも、さしずにしたがって、四つかどを通りぬけました。

「こんなにたくさんの人が、いるから、いろいろなものをはこばなければならないのだね。町ののりものはひらけていくわけだね」。

「おじさん、この町もべんりだけれども、東京へ行くと、もっとすごいわよ。地下鉄や、こうかせんや、とない電車などが、それこそ目のまわるようにはしっていますもの。百か店などには、エレベータ、ーもあったわ」。

このあいだ、東京へ行ってきたばかりのおねえさんが、じまんそうに話しました。

やがて、みんなは家につきました。おかあさんや、おとうさんが、げんかんに出むかえました。

「あけましておめでとう……。」

とおたがいに、うれしそうにごあいさつをしました。

のりものしらべ

三学きもはじまって、みんなべんきょうをはじめました。一つ年をとったので、べんきょうがじょうずになりました。一組の人たちは、のりものしらべをはじめました。りく上のもの、水上のもの、空とぶものにわけて、のりもののえず表をつくるのです。

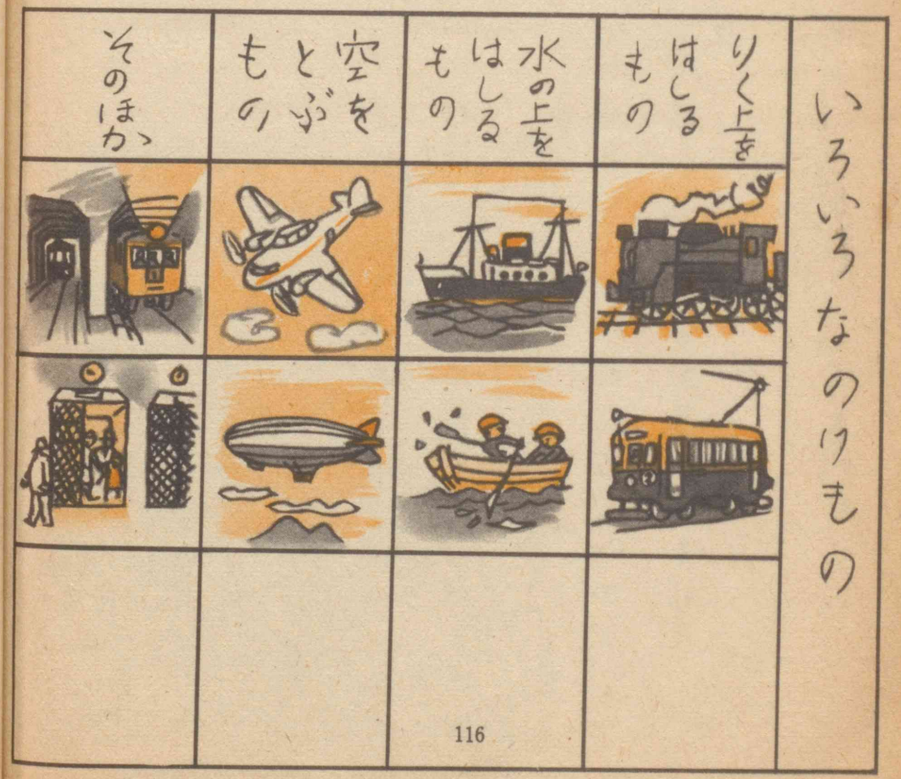
ところが、地下鉄や、こうかせんをどこにいれたらよいか、みなさかんに話しあいましたけれども、なかなか考えがまとまりませんでした。先生が、

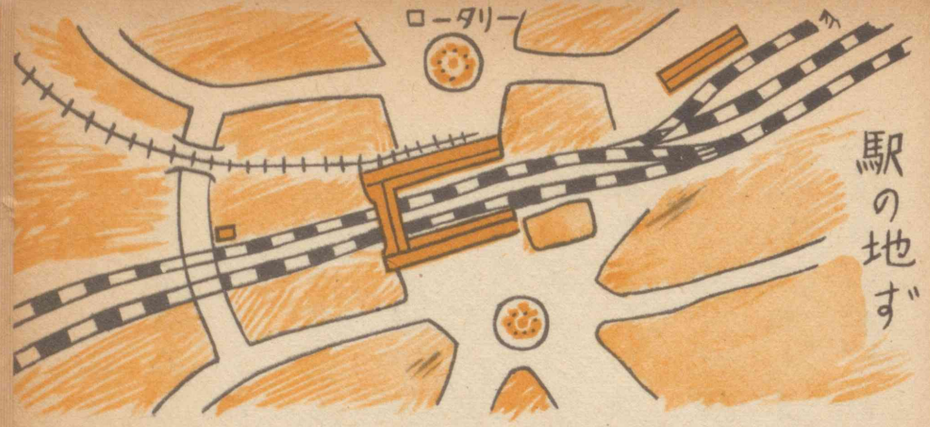
「さあ、どうしたらいいでしょうね、りく上、水上、空とぶ

ものほかに、そのほかというのをもう一つつくったらどうだろう。」とおっしゃいました。

みんなが、「それがいい」といって、さっそくしごとにとりかかりました。

二組の人たちは、町の地ずをつくって、いろいろなのりものの道すじを





駅の地ず

かきいれています。地ずにあらわす時には、北を紙の上の方に、南を下の方にかくことや、東の方を右に、西の方を左にかくことがよくわかりませんでした。そこで、先生が

「ほら、この町の地ずをよく見てごらん。地ずの方がくがよくわかるでしょう。」

といって地ずを見せながら、町のかたちを大きな紙にかいてくださいました。

「あとは、みんなでつくってごらんなさい。よくそうだんしてやればきっとうまくできるでしょう。」

といって、ほかの組の方に行かれました。

しげる君たちは三組です。この組は駅でのつみにおろしにをしらべて、表をつくっています。先生が、

「しげる君たちは冬やすみにもしらべたので、こんどは一そうよいものができるでしょう。」

とおっしゃいました。

しげる君が、

「わたしたちはまえのよりもっとくわしくしらべて、表をつくりたいと思います。駅にしらべにいっていいですか。」

とおたずねしました。

「そうだね。ほかの組も、それぞれしらべたいことがあるの

で、あしたいっしょに出かけたらどうかね。」

「では、きょうはどんなことをしらべたらいいか、みんなでよく、そうだんしておきます。」

と、あきら君がこたえました。

四組は汽車と電車のもけいをつくっています。あつ紙で、おもしろそうにこしらえています。ゆき子さんが、

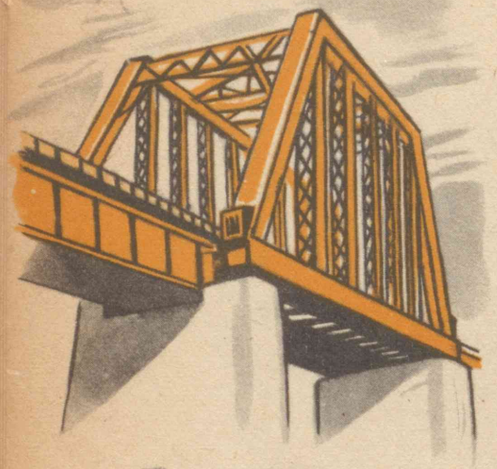
「きかん車には、車がいくつついていたかしら、……みよ子さん知っている。」

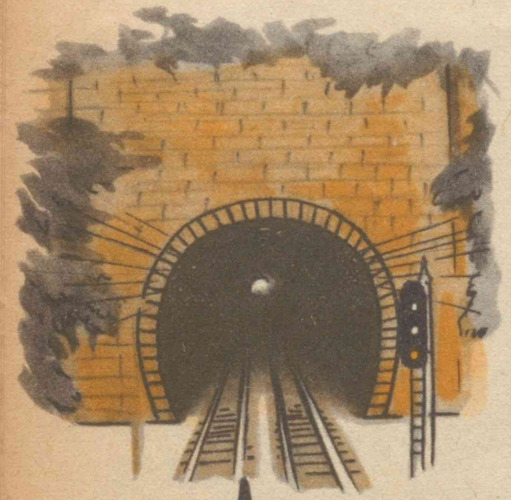
とたずねました。

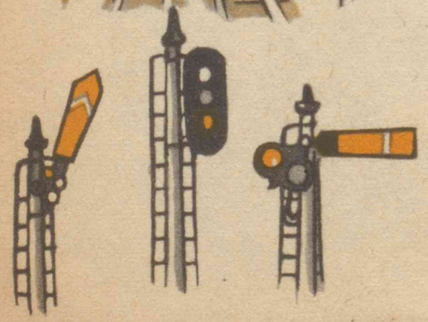
「さあ、いくつあったかしら、わたしうっかりして、よく見てこなかったわ。」

「こまったわ、……だれか知っているかしら。」
だれもくびをひねっているばかりでした。次郎君が
「ちょっと待って、この本にあるかもしれない。」
といって、「きかん車」という本をひらきました。みんながよって見ますと、車のかずも、きかん車のかたちも、きれいにかいてありました。
「みんな、これはよくわかる。これを見てつくろう。」
といって、たのしそうにしごとをはじめ

ました。五組の人たちは、トンネルや、鉄きょう、しんごう、てんてつきなどをしらべて、えにかいています。てつお君のおとうさんは、駅につとめているので、てつお君はいろいろなことをよく知っていました。みんなは、汽車や、電車が早く安ぜんにはしれるわけがよくわかりました。







発表かい

みんなで、駅の見学に行ったり、本を読みあったり、先生のお話をおききして、だんだんべんきょうがすすんでいきました。きょうは、しげる君たちの組の発表する日です。しげる君や、あきら君は駅での、つみに、おろしにの表をこくばんにはりました。

そしてつぎのような発表をしました。

「この駅からつみ出されるものは、おりもの、ひりょう、のうぐ、なべかま、くすり、家ぐ、ざっしるいです。この駅におろされるものは、お米、いも、やさいなどの食りょ

う品、材木、まき、炭、石炭、じゃり、セメント、石材、鉄材などです。この表をつくりながら気づいたことは、いままで知らなかったひりょうや、くすりがこの町でたくさんつくられていることと、石炭がたくさん町にはこびこまれているということでした。あき君のおじいさんが、駅の前で、うんそう店をしているのでしらべるのにとてもつごうがよかったのです。なにかしつもんがありますか。

といいました。

「そういうものはみんなかもつれっ車ではこぶのですか。」

「トラックやリヤカーでも、たくさんはこんでいます。」

「これはおもに、かもつれっ車ではこぶものですか。」

「うんそうがいしゃのトラックで、はこぶものもはいってい

ます。」

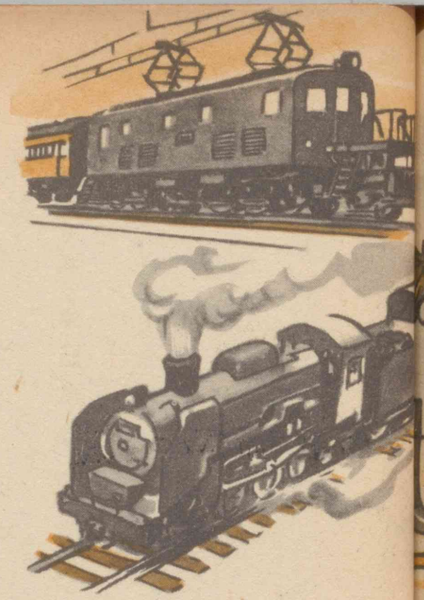
「もっとほかにあると思います。このあいだ、駅にたくさん牛がはこばれてきましたよ。」

「それから、みかんや、りんごなどもありますよ。」

しげる君たちは、ちょっとこまったかおをしました。

先生が、

「そうですね。たしかに三組の人たちが、かいたものだけではないでしょう。まだまだ、いろいろあるでしょう。でも、この表には、とくべつおおくはこばれるものをしらべてかいたのでしょう。おろしにを、ぜんぶあげれば、もっとたくさんになります。」



「そのほかにききたいことは。」

「みかんはどこからくるのですか。」

「みかんは、わか山けんやしずおかけんです。ぼくのうちでも正月におくってもらいました。」

しげる君は、とくいになってこたえました。

「材木や、まきや、炭はどこからくるのですか。」

「さあ、それはまだしらべませんでした。」

先生が、

「なかなかよいしつもんですね。これからみんなでしらべてみたいですね。駅からのつみには、いったいどこへ行くのでしょう。きっと北は北海道、南は九州の方まで行くものもあるでしょう。そのはんたいに、この駅におろされるものは、日本のさまざまなところからくるのでしょう。」

といって、むちで地ずをさしました。みんなの目は、教室にはってある日本地ずにむけられました。

ちょうどその時、ポポー、ガシャンコガシャンコという、かもつれっ車の力づよい音が、教室にひびいてきました。

先生と御両親のために

この本は、三年生の社会科の教科書としてつくられたものです。編さんの方針としては、上巻とともに「学習指導要領」社会科編1と、その補説の趣旨をあらわすことにつとめるとともに、子供の生活と、発達とに即することを旨としています。そのために、子供が直接経験している地域社会の生活を足場として、のりもののはたらきと、社会に於ける人間の日常生活とが、どんな関連をもっているかを、子供の程度に応じて理解させるように工夫しました。さらにこの理解をおし進めて、文明の開けない頃の交通運輸の状態とを比較させて、昔から永い間人々が

苦労して交通運輸の方法を工夫し、改良して来たことにも気づかせたいと考えました。

そして、やがて子供達がこの進んでいく社会に適応し、貢献していけるような理解や態度や能力を養いたいと意図しました。

以上はこの本全体を通じての方針ですが、特に、第一の「船と港」では、

港の見学の経験を通して、主として海の交通運輸を中心に学ばせ、それが人々の生活とどのような関連を持っているかを、文明のひらけない前の交通運輸とも対比させながら、理解させるように考えました。

なお海運と陸運とのちがいや、つながりについても理解させるようにしました。

学習内容としては、つぎのことがらが主として考えられています。

○港と船着場のこと。

そこにある船の種類、乗客や貨物のこと。

鉄道との関連、船と観光や、魚のとり方のこと。

○鉄道と道路。

駅にはたらく人々の様子、乗客や貨物、郵便物、駅付近にある安全施設、トンネルや鉄橋のこと。

鉄道の開通以後の部落の変化。

昔の宿場や一里塚のこと。

つぎに第二の「かもつとかもつれっ車」では、

○年のくれに、ある家に和歌山からみかんが送られること。

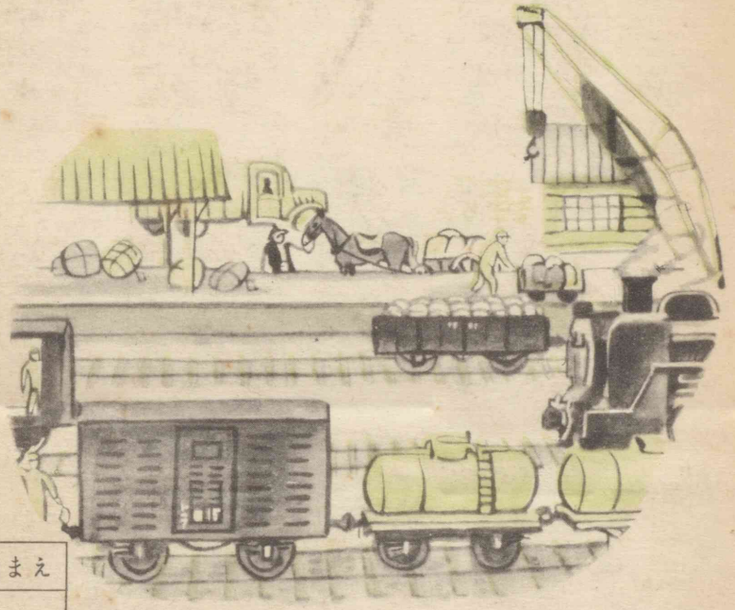
○そのお礼に本箱を送ること。
○和歌山のおじさんが町に出てくること。
これらの具体的な話を通して
○土地と土地との相互依存と交通のはたしている役割。
○交通運輸の様々なはたらきのこと。
○郷土からのつみ荷、おろし荷のこと。
○運輸にたずさわっている人々のしごと。
○昔の人の交通のこと。
などを理解させようと考えました。
なお、子供の好む様々な学習活動を行わせることによって、此のような理解を深め、且つ望ましい社会的態度や能力を養おうと意図してあります。

編修委員

東京家政大学学長　青木誠四郎
東京都桜田小学校教諭　室井光義
同　片岡龍一
東京学芸大学追分付属小学校教諭　松村謙
東京学芸大学大泉付属小学校教諭　染田屋謙相
東京都大泉高等学校教諭　森田康之助
東京学芸大学竹早付属小学校教諭　野口竹夫

さし絵・表紙
竹原聖千　中島章作

のりもののはたらき（小学校社会科第三学年後期用）
昭和二十六年五月十日印刷
昭和二十六年五月十五日発行
（昭和二十五年八月十二日文部省検定済）
定価　円
12 二葉　小社 310
著作者　代表者　青木誠四郎
発行者　東京都北区稲付町一丁目二〇八番地　二葉株式会社　代表者　大野治輔
印刷者　東京都北区稲付町一丁目二〇八番地　二葉株式会社　代表者　大野治輔
発行所　東京都北区稲付町一丁目二〇八番地　二葉株式会社



なまえ

広島大学図書
0130449978

二　葉　株　式　会　社